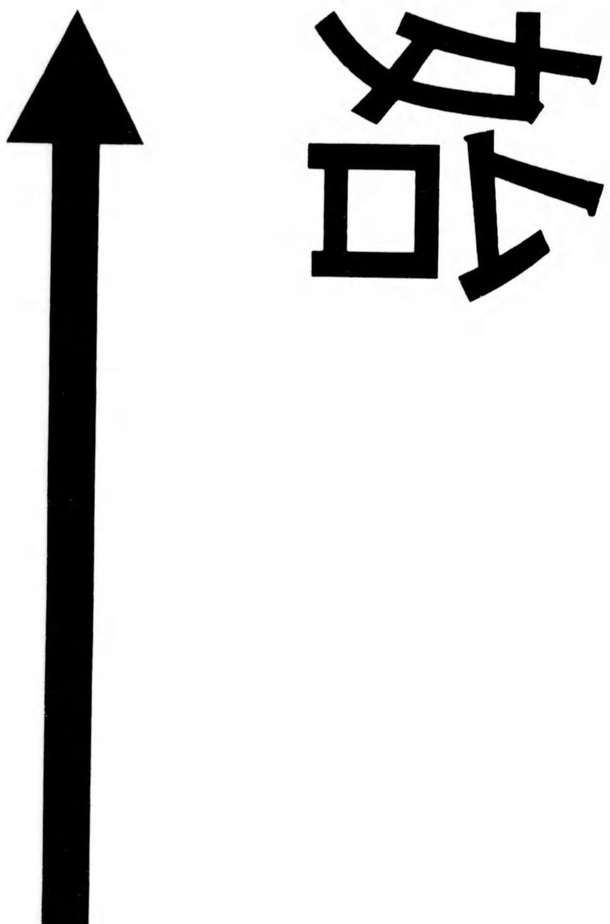
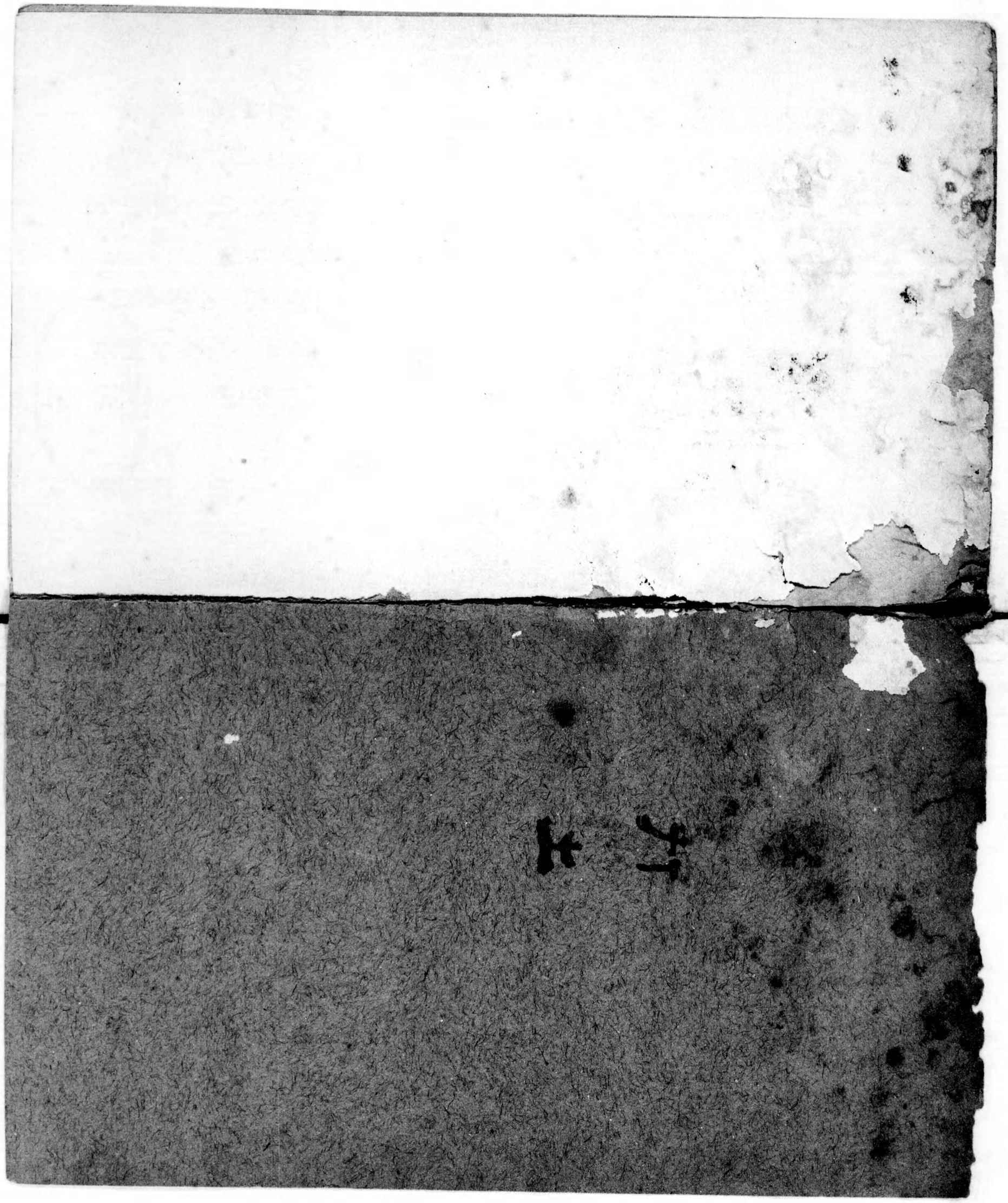
海牛出版人

特102
1847

2190





特102
481

序

横看すれば嶺を成し、側看すれば峯を成す。人物の妙處此に在り、而して評論の趣味亦た此に在り。

古人云ふ、天下不好人なしと。況や千百人に傑出して、巍然頭角を社會に露はすの士に於てをや。かの徒らに陰微を摘發し、瑕疵を抉剔し、罵詈嘲笑排擠搆陷以て能事とする如きは、斷じて人物評論の正鵠を得たるものに非らざる也。

大正 8.9. 内交

友人片岡仁泉君編する所、『近代土佐人』筆鋒快利、恰も痲姑を傭ふて痒きを搔くが如く、而も阿諛に渉らず、辛辣に失せず、横看側看の中、美を成すの意自から見はる。是れ最も我心を

獲たり。

但だ近代土佐人の評論して傳ふべき者、豈に七十幾人に止まらんや。意ふに續篇續々編の更に上梓さるる遠きに非ざるべし。請ふ刮目して之を待たん

大正二年十二月廿日　　斗南生

著者曰はく

本書載するところの人物は、著者が明治四十二年以降高知に於て發行の土陽週報、及び高知萬朝報の兩新聞紙上に掲げし舊稿と、最近戯れに筆にせるもの數編とよりなる。觀察の當否は一に讀む人の批判に委せんのみ。

書中二三の縣外人を挿めるは、執筆の當時本縣に在住し縣人との交渉特に深かりし人々なれば也。

本書に收むる人物約七十許名。文各長短あるは、主として當面の人物として時々現はれ來りし人々を論評したるを以て、關係舞台の模樣に支配されしに由る。必ずしも人物の大

小に拘はりたるにあらず。

若し夫れ此の書を何故に公刊せしかと問ふ者あらは、答へていはむ、病褥の裡、聊か我れ自らを慰めむが爲め也、と。卷頭に於て著者の語らんとせるもの、唯だ是れのみ。

大正二年十二月十五日

高知市外小高坂村の病窓に於て

近代土佐人目次

池忠彦　一
岩崎俊彌　三
石山熊彦　四
茨木定穀　七
原次郎　八
西山精一　一〇
豊川良平　一四
富田幸次郎　一五
土居貞彌　一七
友綱貞太郎　一九
千頭德雄　二〇
大町桂月　二三
大原里靖　二四
岡田榮　二六
岡林起盛　二八
大江卓　二九
尾崎と植田　三一
大谷順作　三四
和田和　三六
和田世民　三九
川田小一郎　四一
川田鐵彌　四三
川崎幾三郎　四五
垣内正輔　四七

横山又吉　五〇
依岡觀　五二
高原伊三郎　五五
田岡嶺雲　五七
田村文四郎　五九
竹村與三兵衛　六一
田村逆水　六三
中野寅次郎　六六
中島氣峰　六八
上田開馬　七〇
宇田友四郎　七二
信清權馬　七五
楠瀬幸彦　七六
山本忠秀　七九
槍澤直幸　八一
山口兼良　八三
安岡雄吉　八五
町田旦龍　八六
松村寛藏　八八
松岡虎八　九〇
松尾富功祿　九一
牧野富太郎　九三
福留鐵藏　九四
藤澤富士馬　九六
小松與右衛門　九七
小西鹿吾　九九
小男十五人　一〇一
寺山安高　一〇三
安藝愛山　一〇六
安部正十郎　一〇八
有光光與　一〇九
佐野傳　一一一
澤田牛麿　一一三
坂本志魯雄　一一六
光森德治　一一八
水野と吉本　一二二
三谷軌秀　一二五
白石直治　一二八
下元馬吉　一三〇
島村速雄　一三三
島村菊太郎　一三五
酒造家中の變り者　一三六
東元多三郎　一三八
仙石貢　一四〇
須藤傳次郎　一四二

以上

近代土佐人

片岡仁泉　編

池忠彦

（イロハ順）

今や我が高知市は、其の夜を哭すに電燈あり、瓦斯燈あり、地に寸尺の鐵路だに無く、上國との交通依然として隔絶せる土佐の山國に誰か想はん落暉一度西に沒して、夜の垂帳掩ふに至れば、唯だ見る紅々紫白の麗光燦として白晝を欺くの滿飾市街の出現するあらんとは、實にや高知市の夜の設備は瓦斯の完成と共に殆んど遺憾なき迄に整頓せり、電燈の恩惠を知る者は新に瓦斯の利福を感ぜざる可からず、余は此の意味に於て瓦斯の創始者池忠彦に向つて一種の敬意を拂ふ

◉彼は土佐の實業社會に於ける風變り者の一人也、蓋し世に所謂實業家なる者は

概して山氣を帶び、心的狀態自ら飛び放れて、動的なるを例とするも、彼や然らず、天資飽く迄も穩健着實にして、如何なる場合にも泰然として心裡靜平に、一見君子の風を具へて、又た彼の山氣の如き之を藥にし度くも遂に求む可からざる也、案ずるに實業家として知らるゝ者の多くは、商事に於て成功したる者也、夫れ商事は直ちに掛け引きを意味し、策略を意味す、這中に成功したる者流の山的臭味を帶べるは理の當に然る可きところ、唯だ忠彦に至つては全然彼等と出所進退を異にして、身を地方の大地主より出せる也、彼の鄕里は吾川郡八田村にして八田の大池は彼が家の代名詞也、由來地方の豪家に生れたる者は天凜自ら純潔高尙にして人格野卑ならず、其の殿樣然たる大家育ちの風品は容易に他と相染まざるを觀る、忠彦の普通の實業家に比して人格の些か他と其の趣きを異にせるも理ならずや

◉然れ共彼はまた決して單純なる殿樣的人物にあらざる也、無策無謀の平凡漢にあらざる也、彼の活眼は常に爛として輝けり、されど彼は一般實業家の慣用手段

とせる詐術を弄びて表面的手品を演ずるが如き途に出でず、徐ろに藪叢の中に蟠居して機の來るを俟ち、一度來れば一躍之を捉へて苟も遁がさず、其の靜中に動を見て毫も貼ひを誤またざる所、正に是れ猛虎の負嵎にも比す可き也、要するに彼は同じ實業家中に於ても眼界の聊か高く且つ廣き一人也、輕舉盲動徒らに表看板の修飾にのみ腐心するが如きは彼の極力忌む所にして、飽く迄も實力を擁して堂々の陣を布く所に於て彼の本領を看る可きが如し、瓦斯事業は是れからなり、而して我が池忠彦の未來は尙遼遠なり、余は土佐に彼が如き眞面目なる新實業家の漸く頭を擡げ來らんとするを慶ぶ

岩崎俊彌

◉岩崎家には寶多し、金庫の中に三枚錠で藏つた土地臺帳も寶なる可く、天に翔り地に潛つて蒐集したる書畫骨董も亦寶なる可し、然れ共同家眞個、寶玉中の寶玉寶物中の寶物は大阪朝日硝子會社長岩崎俊彌を措て他に求む可からず

◉俊彌は社長にして社長に非ず、會計課長を兼ねたり技師を兼ねたり、職工も亦之を兼ねたり、錦茵を下り綺羅を捨て、弊衣を纏ひ勞役に服し、孜々吸々、誘惑多き大阪社交界に超脱して硝子改良の外優遊の天地なく、慰樂の天地なし

◉彼常に人に語りて曰く、進歩したりと稱する我が工業界も俊彌が眼には未だ幼稚なるを免れず、不省一身、以て硝子製造の世界的勝利を博せんと、彼の自信と熱心とを以てしても、未だ我工業界に板硝子を產するに至らずと雖も、其の理想に生き理想に死せんとするの覺悟に至つては誠に嘉賞に價するなり

◉頃日、牧野農相人に語つて曰、岩崎家は其巨萬の富よりも彼を有するを誇とす可しと、豈啻に岩崎家の誇のみならんや、我が工業界の誇なり、我が土佐の國の誇なり

石山熊彦

◉若し夫れ、土佐へ蠻襟黨なるものを組織するとせば、海南中學校の教員石山熊

彦の如きは、優にそが首領たるの地位を辱めざる一人なる可し、實にや彼れは劍客としてよりも、寧ろ蠻骨の太きを以て世に知らる

◉彼れの蠻氣滿々たる、素天賦の然しむ所ならんも、而かも其の天賦を遺憾なく發達せしめて、毫も之れに人工を加ふる無からしめたるは、彼れの最も崇拜せし蠻襟主義の教育家、吉田前校長の力與つて多きに居るを認めざる能はず、窃かに聞く、往年土佐の學生間に鷄姦、俗に所謂オカマの流行するや、吉田は公然生徒を誡むるに、オカマは必ずしも惡事にあらず、但だ徒らに美少年を强姦するに至つては斷じて不可なる旨を以てしたり、當時熊彦は同校の生徒として、特にオサエの名高かりし者

◉彼れ一日、棒堤の北側に於て、白晝或る美少年を捕へ之れを短艇の中に姦す、偶ま校長其の現場を認め、烈火の如く忿りて、『熊彦夫れは何だ』、と大喝するや熊彦平然答ふらく、『和姦です』と、流石の吉田も、是には續いて責むる言葉なく其の儘苦笑して去り、後日熊彦は存外面白い男ぢやとて、大に彼れを愛したりと

いふ、姑らくオカマの是非を問ふ勿れ、熊彦天賦の蠻氣が吉田の力に負ふ處の尠なからざる以て徴するに足らずや、彼れが校長のお氣に入りたりしに拘らず、反つて十年の永きを費やして海南學校を卒業したる、夫れ或は已を知れる校長の膝下を離るゝに忍びざりしが爲か、呵々

◉彼れの曾て好配を索むべく、見合に行くや例の紺の筒袖に紺の兵兒帶を締め、素足に棕梠緒の高木履を穿き、右手薪の如き大杖を曳きずり、左手粗なる山羊髯を捻り乍ら悠々として赴く、到る所の美人、一見驚ろいて襖の中に隱れ、更に要領を得る能はず、其の偶々茶菓子を進めらるに遇へば、初め決して之を食はず、歸るに臨み、急に貰つて行きますとて、悉く懷中にねぢ込んで去るが例なりき、人或は彼を後の江田文四郎となす、蓋し當らずと雖も遠からざるべし、既に石山家を繼ぎ、母校の教職に就ける熊彦は、又當年の細木熊彦にあらざれど、今尚手に大杖を放たずして、異樣の風采人目を奪ふ所、彼は到底土佐一品の蠻襟たるを免れず、然りといへども吉田校長沒後の海南學校に、依然として一種の吉田風の

吹ける、豈に此の蠻骨ありて克くこれを保存せるが爲めに非ずや、果して然らば彼の蠻骨も亦有用の蠻骨か否か、（明治四十四年稿）

茨木定穀

◉蠶糸同業組合の茨木定穀と謂つたら蠶業社會ではよく聞いてゐるが、一般社會にはまだ餘り名聲を馳せて居ない樣だ、と云ふのは君が多年組合の副組長として事務所の一隅に隱れ十年一日の如く限られたる蠶絲の一方面にのみ齷齪として、毫も夫れ以外に一歩も足を踏み出さないからである

◉君は國學家茨木定興氏の息で、若い頃は家學のお仕込みをも受けたものだが後到々嚴父とは行方を違へて、西が原の蠶業講習所に學び蠶業家となつて了つた、さうして同窓の友多くは技師となり、高等官の待遇を受けてヅン〳〵昇進しつゝあるのを冷眼視し、比較的名聞利達の途に緣遠い蠶糸同業組合に据はり込むで、努力熱心、殆むど献身的に土佐蠶業の進展發達を期して渝ることがない、君の如

き人物こそ産業界に於ける模範人物と稱すべしであらう

◉素養もあり文章も書ける、而して黨業の上に就ては卓越せる多々の意見を有してゐて、種々の問題の起る度に、君は口に筆に盛んに論議し、傍ら縣當局に向つて進言援助の勞を吝まざる、而して其の多くが悉く採用せられ、實行さるゝ所などに徵し來れば、君は何と云つても土佐黨糸界の先輩である

◉平素は頗る眞面目な方で、其の面前に痴話の一つでも話さうものなら君は忽ち顏を反向けて席を起つて遁げると云ふ謹嚴家だが、酒は存外いける方で、醉ふたら隨分面白い氣焰を吐き、素面の場合とは全く別人の觀がある、子供が八人もあると云ふ點から考へて見れば、君の眞面目は人工を施した眞面目だなどゝ斯界の英雄連は揶揄しつゝ居るが、事實の如何は吾輩聊か斷言を憚るからやめて置く

原　次郎

◉其の頭を一分刈にせるの點に於て、其の眼光爛々人を射るの點に於て其の鼻の

非常に太き點に於て、更に其の鬚髯の關羽式たるの點に於て、我が高知警察署長原次郎君は、慥に男性的高僧の風がある、知らず彼は果して如何なる人物ぞ

◉若し彼の風貌よりせば、彼は當に霜氣森々背に鎗さす北風的の人に見ゆる、が併し其の實際は之と正反對で、君は寧ろ或程度迄は和氣靄然、温乎たる東風甚だ人に可なるの觀あるは、何人も意外とする所威ありて猛からず、寛嚴宜敷を副ふる點に於て、實にお誂へ向きの警察官と斷せざるを得ない

◉勿論神ならぬ人間には、誰でも短所がある、原君好警官なりと雖も、亦是れ人間である、其の高知署長としての云爲擧措の中には、幾多の欠點もあらう、十人十色の觀察眼よりせば、多少の失態を認む可きものもあらう、然れ共立憲政治は輿論政治である、多數の認めて善なりとせば、其の政治は善なりとせざる可からずで、社會の官吏に對する評判も、常に多數に基いて斷せねばならぬ、而して原君に對する評判如何といふに之を警察部内に徵するも、之を一般市民に叩くも、概して吾輩の所謂好署長に一致するから君自身の爲にも、幸慶といはねばなるまい

◉彼は職業の上に於て、サアベル一本調子の人である、宮海に身を乗出す最初の舟棹矢張り此のサアベルであつた、過般内川安藝郡長が退職するや、彼は其の後任たる可く交渉に接したけれど、慣れぬ役目は必死だ、とあつてすげなく謝絶して依然たる警視、蓋し自知の明ありといふべしである

◉彼、酒を飲むで噪ぐも、歌は極めて拙、酔へば必ず拳を打ち、指角力を取るの奇僻あり、時に漢詩を作るありと雖も、所詮惡詩の類、未だ曾て世に公にしたるあらずと、些々の僻亦以て原次郎の人物を語るに足らんか

西山精一

◉長岡郡民諸君、諸君が多年戴いてゐた佐藤郡長は、今回其の職を免じられて、諸君は新たに西山郡長を迎ふることゝなつたのである、吾輩は茲に諸君に向つて諸君の新たに迎ふべき西山精一君の如何なる人物なるかをお知らせしたい

◉西山君は最初、小學の教員として藝陽の田舍にかくるゝこと約十年、後郡の常

設勸業委員に選ばれ、更らに文官普通試驗に合格して、三十二年初めて縣廳の會計課へ出勤するに到つた、斯くて或は安藝郡書記に轉じ、或は縣廳に舞戻り、役人の生活を續〻る事十餘年、三十九年遂に農林課長を命ぜられた人である、で彼は敎育の事業に就ても相當の智識を有し。官吏としても隨分久しき閲歴を有す、特に勸業の事柄に至つては黒人も大の黒人、殆ど盡さゞるなしと云つて好からう

◉諸君は御承知であらうが、彼は色の黒い頰骨の出た、目の光る疲せ長い一見何となくイゴツソウめいた人物である、彼は或る意味に於て、其の容貌に現はれたる如く、中々苦いイゴツソウだ、腰の強い事鐵棒の如く、苟も自分に一旦斯うと極めた事をば、假令上官の命令でも、容易に飜さない、そして知事の前でも事務官の前でも、あらゆる問題に關して是非を論爭することを辭しない男である、然れどもさうかといつて、彼れは決して頑固官吏ではない、彼れには一種狂ぐべからざる氣骨のあると同時に、又た見識がある、意氣がある、抱負がある、主義がある、主張がある、そしてお負けに覇氣タップリで其の人前で腰が強く、頑張る

所のものは皆此の見識や意見やのそれから生れて來るのであつて、沒分曉の俗吏が只役人風を吹かせて頭を左右に打ち振ると云ふ融通の利かぬ者等とは雲泥の相違がある

◉然り、彼は到底融通の利かない樣な變人ではない、寧ろ度量は存外に宏く、常に洒々落々と陰險な分子は少しもない、飲みもすれば食ひもするし、歌ひもすれば踊りもする、則ち官吏としては割合に捌けた方で、一言之を掩へば豪傑式の男であるのみならず、今迄の役目が實業と深き交渉を有するだけ、其の立ち廻りは極めて華かに、交際も巧みで、人に接する城府を設けたり、毒付いたりする樣なことはない、要するに彼れは鎌の充分に切れる才物であるのである

◉彼れは上官に對して、苟も屈せざる硬骨吏たると同時に、部下に向つては何所迄も親切な情愛深き美質を備へてる、で數十名の部下中、未だ曾て一人だも彼に對する怨嗟の聲を放つた事がない、特に注意すべきは農林課には四名の奏任技師が居て、彼は是れ等をも亦差配せねばならぬ處が、其の操縱の巧みなるウンとも

スンとも謂はせなかつた此の一事に徵するも、彼れの材能が判じられはすまいか

◉彼れの學識の程度に至つては、吾輩も之を詳知してゐない、けれ共曾て教職にあつたし、文官普通試驗をも通り抜けたとすれば、例の給仕から漸次送りに送り上げられたやうな、役人とは仝日の論ではない、若し夫れ演說の要領を得る点に至つては各郡長中では珍らしからう、彼れ年齡正に四十有三、蓋し老朽の意味を以て諸君の郡へ祭り込まれたのではあるまい、當路必ずや彼れに見る所あつて爾りし所以だらうと信ずる

◉諸君の郡は、由來幡多郡と共に難治郡と稱せられて居る、是れといふのも、必竟するに代々の郡長が諸君よりもヨリ以下のヌルイ人物許りで、充分其の威信を保ち得なかつた爲めではあるまいか、此の点から云へば諸君の新たに迎へんとする西山郡長は或は、諸君の郡に最も適當してゐるかも知れない、まあ試して見給へ、今度の郡長は諸君が從來の郡長を衝いたり搖さ振つたりして厭からせたと仝樣の筆法で飜弄する事は、迚も出來ぬやうに思はるゝよ

◉附け加へて謂つて置く、彼れは昨年細君を失つて以來今に淋しい獨身である、長陵の野由來美人才媛に富むと云へば、諸君は場合に依り此新郡長の爲めに、月下氷人の粹を利かせても惡うはあるまい（明治四十四年）

豐川良平

◉凡そ土佐人士に二種の系統あり、一は智計巧密、利害に敏なる策士肌の系統にして後藤象次郎、林有造之を代表し、他は寧ろ剛愎偏固、温情にして理想に富める君子肌の系統にして、馬場辰猪、板垣退助之を代表す、我が豐川良平は大石正巳と共に後藤、林の亞流也

◉豐川が性格風度は、寧ろ政治界の人に近く牙籌界の人には非ざるが如し、其の放縱にして豪宕、細事に拘々たらざるの度量は、時に國民黨が財源となり、同黨土佐系の謀議に參し、或は往々にして其不謹愼の言動は、信用本位の實業家をして顰蹙唾棄せしむるものなからずとせざる也

◉然れ共、世は既業に波瀾重疊の時代なり、正直者は馬鹿者となり、狐の如な男がヤリテの時代なり、豐川が多種多面の性格は往く處として可ならざるなく、爲す處として成らざるなし、其の政治家肌にして實業界の重將となり、其實業家にして政治界に重きをなせる所以也

◉三菱家今日の旺盛は彼が性格に配するに謹嚴深沈なる莊田平五郎を以てせしに因る、今や莊田去つてなく同家監督の重任は豐川が双肩に在り、宜しく其短所に省みて愼慮一番するもの莫る可からざる也

富田幸次郎

◉土佐人は惣じて自我の念强く、動もすれば剛頑迷不屈、敢て先進の門に出入して其の知遇を受くるを潔しとせず、高材反つて戚々の窮に陷り、空しく獺獺の笑を抱く風あれど、中には偶々異流の存し、克く他の睾丸を摑んで凡者も容易く現代的成功の域に達する無きに非ず、代議士富田幸次郎の如き、即ち明かに斯流の

名人なりとす、彼は世間唱ふる如くに、左程傑出せる人物とは思はれず、口に於ては安藝森下等に如かざる遠く、筆と學とに於ては、池、宇田等の累をだに摩する能はず、其の他、年輩に於て若く、財力をも有せざるにも拘らず、幸運隆々として儕輩を拔き、先輩をも威壓せんとするの概ある、問ふ迄もなく彼が先進の睪丸を摑むの術に於て頗る妙を極むればなり

◉論より証據、彼れは最初川北村の一准教員たりしにあらずや、然かも其一躍土陽の記者に進みたる、彼が技能の賜といふよりは、寧ろ西澤岩吉の引きに因る、然して再躍主筆に進みしも故片岡健吉の引きに因り、三躍代議士の地位を贏ち得たる、大石正巳の多大なる引に因らずんば非ず、引といふは半ば客觀の言葉なり之を主觀的に云へば彼れは西澤、片岡、大石等に巧に因緣を結びしなり、即ち其の睪丸を摑みしなり

◉斯くの如く、彼れは先進の睪丸を摑む事に於て努めたり、彼にして若し人は人我は我主義の、剛頑不屈なる普通の土佐ッ兒たりしなからんか、彼は今尙小學教

員たりしやも知るべからざるなり、唯他人の睪丸を摑むの妙なる、小睪丸よりは大睪丸を撰び、一度摑めば容易に放たず、ヅル〳〵上りに上らずすば止まず、往年彼が初めて大石の睪丸を摑みし時の如き、高橋天門、和田螺川等よりそを陋なりとして果ては絶交を宣せられたれど、彼は固く摑むで放たざりき、是れ大石の睪丸の比較的大にして、物になりそうなりしを以てなり

◉果然、大石の睪丸はものになりぬ、而して今や、片手益す大石の睪丸を摑む一方片手更に豊川良平の睪丸をも摑みて、兩者の股間にブラ下る、藝は身を助けるとかや、國民黨院内專務幹事の要職は、忽ち彼れに授けられ、人皆彼が前途の甚だ遼遠なるをいふ、然かも二人者の睪丸にして不幸伸縮力を失ひ、所謂ダラキンとなるあらんか、次いで何人の睪丸に移るべきかは、彼の大に小首を撚つて考量せざるべからざる所ならむ　（明治四十四年）

土居貞彌

◉若し土佐人中、中央舞台に於て特筆大書す可き活動家ありとせば、朝野通信社長土居貞彌の如きも、必ずや其の中の一人に加はる可き資格ありといはざる可からず、彼は固財力家にあらず、學者に非らず、而かも外交手腕の巧妙なる、彼が尙ほ國民新聞記者として政治部面を擔當したりし時に於ても百を以て數ふ在京大小新聞記者中其の外交の点に於て、よく彼に比肩し得る者なかりし也

◉果然、彼は先づ政友會の幹部を自家藥籠中の者となせり、官界の有力者は勿論財界の巨人、乃至は梨園の名流を迄取り込むで、自家の用を爲さしむに至れり、土一升米一升の江戸の地に於て、徒手空拳を揮つて新聞通信の如き難事業を經營する一方、常に上流社會の人士と相往來して、月郷雲客の間に迄、土居貞彌の存在を認めしむるに至れる、尋常凡骨の能く學び得る所ならむや

◉黨人としての彼れ、政治家としての彼には勿論幾多の議す可き点はある可し、然れ共彼が一種の働き手としての價値は、彼の敵も味方も共に俱に認めざる能はざる所なる可し

友綱貞太郎

◉宇多の松原の跡、一株の老松假蹇屈曲して粹蓋地を拂ふの邊、往々異能奇材の人物を產す、我が友綱貞太郎の如き蓋し其の尤なる者なり

●力士海山としての彼は必ずしも多くの贊稱を値ひせず、彼の精悍なる、時に大敵を仆して好角家の喝采を博せしことはあるも、而も其の躰格は遂に彼をして大關たり横綱たるを許さゞりしを以てなり

◉遮莫、年寄友綱としての彼は、天下一品日下開山の稱實に空しからざる者あり英才を薫陶して濟々たる名力士を門下より出すと共に、紛を解き難を斷ち相撲道をして益す隆運に向はしめたる彼の手腕は、到底尋常人の企及し能はざる所なり

◉彼の頭腦は極めて明晰に、彼の意思は極めて强固に、而して彼の辯舌は極めて爽快なり、相撲道の今日ある、時運の然らしむるものありとは云へ、彼の如き好取締を得るなかりせば焉ぞよく此に至らんや、宜なる哉、彼の勢力の角界に蟠屈

して牢として拔くべからざる猶ほ傘松の根のごときものあること

◉『白鷺が小首かたげて二の脚踏んで、やつれやしまいかと水鏡』是れ維新の際我が土佐藩の因循を諷示せるもの、聞く彼れ常に好んで此歌を誦すと、彼が周到の智慮を以てして勇斷果決、決して其機を逸せざる蓋し深く鑑みる所あるなり

千頭德雄

◉溘焉として白玉樓中の人となれる千頭德雄、彼は不幸運兒の好標本なり

◉幸と云ひ不幸と云ふ、實は比較的言辭に過ぎず、新田の八藏ドンは部落總代たるを以て無上の幸とすれども、我が千頭德雄が衆議院議員たり得ざりしは頗むるの不幸たるなり

◉遠慮なく云へば、彼は其の學問識見材幹の種々の点に於て、決して理想的政治家と稱し難し、然れども敢て問ふ、滔々たる代議士當選の人物誰かよく理想的たるを値ひするものぞ

◉過渡の時代には過渡の人物を以て甘んぜざる可らず、彼れ千頭は過渡の人物として必ずしも人後に落ちざるのみならず、其の花々しき活動は曾て土佐の政史に一新紀元を畫せしことあるなり

◉今は二た昔となりぬ、土佐の自由派が縣下を統一するや、萬機悉く中央幹部の手に決せられ、縣參事會の要職の如きも地方人は殆んど之に充てらるゝの資格なかりき

◉專斷は不平を產み、不平は反抗を產めり、郡部出身の人物にして多少氣慨ある者は、中央幹部の所爲に慊焉たらざるなく、而も策の施こすべきなし

◉我が千頭は是時に於て決然として起ち、莵葯版の檄を飛ばして郡部人士を結合せり、結果は衆よく寡を制し、藝の檜垣香の宮地、長の島崎、幡の和田(克次)と而して千頭を以て組織せる內閣は茲に成立したり、是れ郡部派の濫觴なり、而も亦た其の全盛の時代なり

◉爾來彼は高陵同志會長として覇を縣下の財界に稱したりき彼の活動せる時代に

は高陵の廣きを以てして和衷協同一絲紊れざりしなり

◉而も彼れ一たび鹿を中原に逐ふて志を得ず、二たび牙籌を實業界に執りて驥足を展ばす能はず、鏡水の畔、浦門の濱、宿痾を養ふて遂に起たず、何ぞ其の末路の振はざるや

◉或は曰く、彼が代議士たらんと焦慮せしこと抑もの過まりなり、彼をして忍んで時を待たしめば、軈てはお鉢が廻り來りしならんにと

◉或は曰く、彼の心事は楠正行の其れに髣髴せり、隱忍時を待つの可を知らざるに非ざるも、多病なる身は自づから玉碎を急がしめたるなりと

◉郡的人物が郡一致の下に國家の代議士たり得べくんば、彼れ千頭德雄の如きは夙くの昔に當選の月桂冠を得たるべき筈なり、而も其の然らざる、高陵人士も亦少恩なる哉

◉誰か彼の衣鉢を傳ふる者ぞ、山河舊の如し、而も政治地圖としての高岡郡果して同志會當時の如きものあるか

◉頼みなき秋の空、書して茲に至れば、天陰夜黑雨蕭々　（明治四十三年稿）

大町桂月

◉輕妙にして暢達、意往き筆隨ふものは我が大町桂月の文章なり、彼の文章の學生間に人氣あるは、猶ほ漣山人のお伽噺が少年少女界に持囃さるゝがごとし、洵に當代の雙璧と稱すべし

◉彼の筆を執るや、必ず一舛德利を傍らにし腹這ひながら且つ飲み且つ書す、天馬の空を驅るが如く、香象の海を渡るが如く、酒氣沸々として筆端に迸しるの概あり

◉彼は天眞爛漫の男なり、或は袢天にて小供を背負ひ寢んねがもりは何處へ往たを歌ふて市内を散歩することあり、或は學生連を集め已れ亦た其中に交りて相撲を取ることあり、家鷄か座敷に上り來れば麾して食物を與へ、几案の邊鳥糞の狼藉たるも以て意に介せず、彼の磊落なる概ね此の如し

◉彼は大の吃音なり、而も其の演說が常に學生間に受けられて、三宅雪嶺と共に訥辯の雄辯を以て稱せらるゝ亦た珍ならずや

◉『どうも寒いですな』とは彼が演壇に立てる劈頭の語なり、斯〻て先づ滿場をドッと笑はせたる彼は悠々として一息にコップの水を飲み乾し、『諸君醉ひ醒めの水は甘ひですな』と言ふ、是に於て拍手喝采又も大に起る、說き去り說き來り、頭もなければ尾もなき演說を爲して而も聽衆に多大の滿足を與ふる、是れ即ち訥辯の雄辯たる所以なり

◉彼の文章は益す圓熟して近來は殆ど三昧に入れるものゝ如し、世間或は其の退歩しつゝあるを疑ふも、其れ然り、豈に其れ然らざらんや

大原里靖

◉世間意想外の事多し、大に其の驥足を展はずべくして、而かも依然伏櫪の嘆ある我が大原里靖の如き、亦た人をして意想外の感を抱かしめずんばあらず

◉大原里賢を父とし、片岡健吉を舅とし、業を學び最高の府に卒へたる彼は、前途洋々として春海の如きものありしなり、而かも敎育界に一躓二躓し、操觚界に三跌四跌し、放浪漂泊、最早捲土重來の勇なからんとする、彼の近狀亦た憐れむべからずや

◉詮し來れば、彼の失敗は一見放縱の生活に在り、大學生時代に於て然り、中學校長時代に於て然り、而して新聞記者時代に於ても然らざるなく、負債山積產を破り、家を傾け、信用ゼロとなりて、尙且悔ひざるに至て、豪傑肌と云はゞ云へ遂に其の材の用ゆる地なきを如何せん、彼は有爲の器なり、學問あり、文章あり襟度寬宏、相當應酬の才を具へて、殆ど活動的人物の標本たり、彼をして政治家たらしめば、立派な政治家なるべし、敎育家としての彼は、餘りに磊落放逸に過ぎたり、彼亦た、自ら其の適材に非ざるを知るが故に、操觚者となれり、其の操觚者となれるは驅て政界に馳驅するの準備たりしなり、惜むべし飛ばんとするの時は羽翼の破れたるの時也、代議士たらんとするも彼の資財は既に蕩盡されたるな

り、資財の蕩盡尙可なり、彼の放縱の病は已に膏肓に入りて、復た治療すべからざるなり

◉希くば彼をして、新しき生命を得せしめよ、而して我をして失言の罪を謝せしめよ（明治四十三年）

岡田榮

◉紛々たる舊人物の出頭沒頭するの煩に絕ねざる折柄、政友會か白石直治、岡田榮の兩君を候補に立てた手際は酷く我輩の氣に入つた、況むや其人物、經歷、識見抱負の夫等に於て、兩者共に一國の選良として、毫も其名實を辱しめざるに於ておやである、就中岡田君は年齡の尙大いに若くして、前途の太甚多望、有爲の器たるを以つて、敵も味方もから非常に囑望されて居る

◉彼は中央大學卒業後、判檢事辯護士等の試驗に及第し、神戸、大阪の兩地方裁判所判事を經て關東總督府の審理官、同都督府法院判官兼檢察官、等に歷任し後

韓國政府の招聘により法務補佐官となつて居たこともある、今は一切の官職を拋ち朝鮮で辯護士をやる一方七大會社の法律顧問となつて法曹界に嘖々の聲望を有してゐる

◉以上の經歷よりするも、彼の如何に有爲の材であるかゞ判るであらう、若し夫れ一度彼に接せんか、其の堂々たる体軀、色男然たる容貌は能く調和の妙を得て女も男も惚れ〳〵する樣な所がある、而かも其の談論は滔々盡くるを知らずして語る者も聽く者も共に時の移るを知らない、彼は外交官となつても優に君命を辱しめざるの手腕がある

◉彼は滿州朝鮮等に於ても非常の信用があつて、過般京城で開かれた縣人會で、滿塲一致本縣よりの選出代議士候補者たらしめ其の當選を期すとの決議を受けた此の一事を見るも、彼の人物は大概判ぜらるるではないか、殊に國民黨高知支部の有力なる人々の中でも、岡田は敵ながら立派な男だ、あれには是非當選させて遣り度い、と云つてゐる者もあるさうだ、亦當代の人氣役者たるに負かぬと云ふ

可しである

◉吾輩は如上の意味に於て、新人物岡田榮君の當選を祈る一人でる

（明治四十五年稿）

岡林起盛

◉縣會議員岡林起盛は、其の組長たる蠶絲同業組合事務所の新築、及び全組合創立十週年紀念祝賀會に逢ふて、更らに或る新らしき印象を縣民の頭に植ゑ込みぬ

◉意ふに彼が經路の波瀾に富める、川村益太郎の夫れにも似たり、時に絲界の王といはれ、時に郡民中傷毀貶の焦点となる、而かも名聲を塵埃の中に挽回し、頭角を毀譽紛々の間に拔き、今や信用ある蠶絲同業組合に長として我が重要物產界に虎視眈々、汎く官民地名の士を招して、得意揚々と紀念す可き組合の一大祝賀會を行ふ所、公私の別こそ存すれ、かの銅山と共に浮沈を共にし、永く黨人中傷の的となりし川村が一朝、大鑛脈に掘り當りて、忽ち土佐の銅山王となり、鄕里夜須の地に盛宴を張りたるの經路とよく一致せるを見ずんばあらず

◉銅山に於て成功せし川村の、前途尙太だ遼遠なるが如く、岡林の前途は春海の如く斯く遙遠なり、彼政友派の縣會議員としては、佐野傳と共に比較的時務を解するの新知識を有し、又た辯才を有す、而して其の八方美人主義を發揮して容易に敵を作らざるの外交術に至る迄佐野と相同じきは奇とすべく、唯だ佐野の飽く迄も冒滿を尊ぶに反し、岡林は時にエッ嚏を放るの差あるのみ、而かも其糞敢て他の圭角ある者の如く辛辣なる臭氣なくして、毫も傍人の爲めに鼻を蓋はれざるは傳へて以て彼の長所となすに足らむか

◉佐野の名をして重からしめたるは、其の縣會議員としてよりも、寧ろ紙業組合頭取となりしに因る、而して岡林の蠶絲や、佐野の紙業に比して兄たり難く弟たり難とすれば、岡林の將來豈に有望ならずとせむや

大江卓

◉古人曰ふ、名は實の賓なりと、大江卓の名既に浩蕩轄達の趣あり其人物に萬里

渺莊として水光天に接する豪宕卓牢の概ある素より怪しむに足らざる也

◉官吏として政治家とし乃至は實業家、謀叛家としても彼は脱線せる人物也、殊に神奈川縣令として其任に在るに當つてや南米秘露の滊船支郡奴隷二百卅餘名を載せて來る、彼即ち其の賣奴行の『歴艙底に在りて逆囚の如く陰風白日聲秋々、豹狼羊を驅る一に何ぞ急なる、或は其髪を斷ち或は頭を摧く』を歌ふて斷然放釋せしむ、敢て國際問題を怖れず況んや紛々たる異議をや、彼は一面復た人權擁護者の第一人なり

◉故陸奥宗光、林有造等と組して西郷の亂に呼應して岩手監獄に送らるる送らるゝに臨んで陸奥に一詩を賦して曰く、北流南竄事匆々、君向羽州吾陸中、一笑乃成十年別、賜環何日醉春風と、出獄後再び垂天の翼を打つて後藤伯大同團結の帷幄に參じ、在獄の宿緣に依り岩手縣より推されて議會に入るや直ちに豫算委員長として手腕の凡ならざるを示す

◉爾來政界に意を得ず去つて實業に就く、東京株式取引所理事長の椅子により或は京釜鐵道創立委員となるも素是れ大江が意に非ず、韓國宮内府顧問たり、時に清國雲南に遊ふも彼にとつては正に屠龍の杖、今や奇才傲骨を負ふて空しく白屋に老ゆ、往事茫として夢か現か、首を搔いて乾坤共に涕淚下る、快漢が末路何ぞ一に如斯くならざる

◉然れ共彼は老伏波也、捲土重來何れの日か風雪に乘じて起たざる、伏波將軍、夫れ自愛して可也

尾崎と植田

◉縣會に於て今尚黨派的色彩の最も不鮮明なる所は、言ふ迄もなく吾川である、人若し吾川の有志に對ひ、尋ぬるに其の所屬黨派の如何を以てせむか、到底滿足な答を得る事は出來まい、實にや、吾川よりは何時の撰擧でも我は政友會なり若しくは國民黨なりと、公然名乘りを上げてかゝるものは珍らしいのである、代議士細川義昌の出がけに於て然り、故中田勘左衛門の出發點に於て然り、而して

前田重雅、岡林直繁、併に南部に名乘りを上げて居る會和貞雄等の行動に徴し來るも、殆ど皆同一徹なるは、蓋し之れ習慣人情の依て然らしむ所か

◉此点に於て、這回北部から國民黨の看板を眞向に振り翳して現はれし植田義朝及び政友會に擁せられて打つて出たる尾崎啓吉の二人は確に全郡歸往の記錄を破るべき先驅者として、多少の注目を牽かしむるに足る樣だ、知らず此の二人者は如何なる人物ぞ

◉漾々たる仁淀川に添ひ、伊野町を北上する一里、滿目白皚々の一鄕、これぞ製紙で名高き神の谷村で、我尾崎啓吉は實に此地の資産家である、彼れの現公職は微々たる郡會議員に過ぎぬ、而して其前半生は村長たる事十四年、郡參事會員たる事一期、郡農會長たる事幾年、驥足未だ中央に伸びずと雖も、彼れの人格、彼の政治的手腕、乃至生ける政治學、名望等は此間に於て充分に圓熟の境に達した

◉植田は縣下の財力家たる片岡宇太郎の卿里、大崎村の才物であつて、郡會議員郡參事會員、郡會副議長、郡農會副會長等に歷撰され、尾崎と略同樣の經路を辿

つたものだが、其の体軀の矮小なる丈け、萬事に機敏で、毫も油斷のならぬ人物政治的の抱負の量に至つては我輩未だ之れを知らないが、其郡會に在るや滔々たる自稱議員連を黨中に飜弄せし事珍らしうない、思ふに政治的手腕も亦、遺憾なく練磨されて居るだらう、要するに彼は才智の男で萬事掛け引きに巧な流、從來政友會に在りながら撰擧の近うなつた過般、突然脫會して國民黨に走りたる、鄕里の吉村寅治、片岡宇太郎等に對する苦衷の案すべきありとせんも、亦彼の機敏主義を發揮して余りありだ、若し夫れ多年吾北に雌伏して風雲の機を覗ふて居た事は尾崎も植田も隨分久しいものだ

◉植田が資産に於て尾崎に如かず、又如かん事を欲せざると同樣に、尾崎は機敏の点に於て植田に及ばす、及ばん事を希はない、尾崎は何所迄も名望に動く人である、君子的行動の以て徴すべき無しとするも、南部に於て數百票の獲得易々たりと稱せらるゝに見ても、彼の人物は略判せらるゝ、植田を智の人とすれば尾崎は德の人、德の人なるが故に尾崎には比較的敵がなく、智を弄するの人なるが故

に植田は比較的敵がある、而れども國民黨に入つて爾來の植田には、片岡吉村等の强援がある、而して尾崎は政友會に於て極力援助すべければ、吾北に於ける此兩新候補者は蓋し當撰疑なからう、大に奮鬪すべしである

大谷順作

◉年奉六千圓の大阪市高級助役に今回選任されたる大谷順作は、安藝郡土居村僧津の生れ東京專門學校今の早稻田大學の出身なり

◉彼れ卒業ホヤ〳〵の身を以て早くも文官高等試驗に登第し大倉省屬、司稅官、稅務監督局長を經、三十四年製鐵所書記官兼農商務書記官に轉ずるまで、彼は實に駈馬に鞭ちて坦々たる大道を疾驅したり

◉知らざる者或は彼を以て一個の幸運兒と爲さん、然り幸運はあり、而も彼が其の地位を贏得たるは主として手腕の非凡なるに歸すべく、決して幸運の爲めのみに非ざるなり

◉彼は好んで盤根錯節を試むべき場所を擇びたり、而して利器を揮つてよく之を裁斷したり、是彼れが技能を人に知るゝに至りし所以にして、又た其の地位の累進して止まざりし所以なり

◉製鐵所經理部長としての彼は蓋し最も其の手腕を發揮せしものなるべし、然れども在職十年、彼の地位は更に一轉進を見ざるべからずして、其の大阪市の助役となれる正に其の機に投ぜるものなり

◉彼は才子なり、而も其才や頗むる大にして世の翻々たる才子の匹儔に非ず、其の製鐵所に入りて半官半民の仕事を爲せるは、畢竟第二期の活動時代に對する準備にして、彼が官海を以て最後埋骨の場所とせざる志を見るべし

◉植村市長は好個の市長なり、其の學殖識見人格に於て殆ど間然する所なきも、而も粉亂せる大阪市政の後を承けて之を料理するには、別に技倆ある補助者を要す、我が大谷は其の適任者なり、而り適任者なるも彼の氣骨の折れることも一通りに非ずして、之を擇べるが則ち彼の彼たる所以なり

●彼れ明治三年十月生れ、當年取て四十一歳の働き盛りなり、蛟龍雲雨を得れば何時迄も池中の物に非ず、努力せざるべけんや

和田和

◉熟々土佐の政界を眺むるに、先輩の士多〻は泰然として老境に入り、後進の人亦徒らに眼前錙銖の利を追ふて、可惜走尸行肉の間に老ひの將に到らんとするを知らざるもの丶如く、斯くて所謂土佐勢力の復活も、やがて痴人の迷夢に歸せんとする虞れなき能はざるに似たれど、而かも其の間、また卓然時流に超越して、頭角を儕輩の中に拔ける前途有爲の士必ずしも絶無といふ可からず、我が和田和の如き、蓋しそが一人たるなからむや

◉近時和田を評する者皆曰はく、彼は現代稀に見るの遣り手也、然れ共其の幡郡に於ける一介の和より、今日の和に至る迄の經路や餘りに單純にして且殆んど一氣呵成的ともいふ可く、今日の彼が成切は其の實際の力量手腕の賜といふよりも

寧ろ偶然の機會彼をして此に至らしめたるものにして、從つて今後に於ける彼の境遇は、上げも下しもならぬ苦しき破目に陷る可しと、宛然翼なくして高塔の上に吹き上げられたる動物に於けるが如く、狂風一過後の極めて危險なりとなすもの是れ世人の和田和觀たるに似たり

◉余を以て之を觀る、高知縣會議長として、將た又た定まれる次期の代議士候補者としての彼が今日の成功は、勿論偶然の機會が彼に多少の助力を與へしにも因る可し、蓋し彼は其の到着す可きヶ所に到着するに、寧ろ驚異す可き、非尋常の速度を以てしたれば也、然れ共彼が成功の一切を、全然機會の賜のみに歸せしむるは大なる謬見たらずんば、彼が現在の地位境遇を羨む者の嫉妬的毒言のみ、彼は決して飄々風力にのみ吹き上げられ又た吹き下ろさるゝが如き、空胴輕量の器にあらず、假令其の乘す可き好機會、否彼を乘せて走るの機會來らざりしとするも、彼は當然現在の地位に到達す可き手腕と實力を有すれば也

◉彼は學問素養の點に於ても、議員中最も深き者の一人也、而して抱負あり、意

見あり、信念あり、又た黨人としての應酬機略に長じ、他をよく縱縱するの手腕を有す、殊に氣宇の豪宕壯邁にして、心膓の洒々磊落なる、自ら長者の風を具へて彼の悠揚迫らざる古英雄の面影を偲ばしむるあたりに至つては、三十議員中誰か又た彼の右に出づる者ぞ、唯だ膽力餘りありて機略に過ぎ、而して時に剛腹容易に人に下らざる場合なきに非らず、又た智慮些か詳密を缺ぐの憾みを免れざることありと雖も、而かも此等は偶ま彼の人物の小ならざるを反證す可き資格の一つとこそなれ、毫も彼の瑕瑾となるものに非らざる也、要するに彼は飽く迄も人に長たるの天分を有す、自然に長たらしめられざる可からざる天分を有す、其の選ばれて議長たる何ぞ怪むに足らん、何ぞ猜するに足らん、若し夫れ彼の明快壯重なる辯舌に於ては、縣下遊説の士乏しからずと雖、恐らく彼に加ふるなけむ、彼は單に辯舌の人としても優に名を成し得るの長所を有する也

◉和田和の現狀を見て以て、其の出世的頂點に達せるものとなし、其の前途を危ぶむは、未だ和のすべてを知悉せず、少なく共和の天分を解せざる者の杞憂のみ

彼は其の何れの方面より見るも、慥かに土佐の政界に於ける新進の大關として更らに中央に向ひ、飛舞活躍を試む可き長き未來と、天分とを有す、他日若し土佐の新らしき代表的人物として、名聲を中央の舞臺に馳する者あらば、庶幾は我が和田和も其の主なる一人たるにあらむ

和田世民

◉今回の地方事務官更迭を機として本縣の內務部長和田世民君も、更迭することに決定した

◉君は最早知事として、充分耻しからぬ經歷と手腕とが出來た、從五位勳五等にして、高等官三等一級の俸を食む、日たる甚だ淺からぬ君は、厭が應でも知事のお鉢は廻はつて來ねばならぬ筈だ、で過般行はれた知事更迭の際にも、君は某縣知事に疑せられて居た樣であつたが、意外にも君が鄕里なる薩州出身の大官中に意見が二派に別れ、君の榮進は到々沙汰やみとなつたと云ふ事である、知事の器を

抱いて、事務官其の儘で動かねばならぬとせば、隨分割の惡い話ではないか

◉法學院在學當時の君は、同窓の友多くは急進主義を執つてサッサと學校を飛び出したるに反し、獨り漸進主義を持して君自身の方から何邊も落第をして遣つて、學校へ大に厄介をかけたものだ、高等文官試驗を受くる時にも矢張り此の主義を奉じて、敢て渝ることなく、試驗委員のすべてと、大分懇意になる程度々試驗場へ出入をして、君一流のトボケタ顏をして試驗委員を驚かせた豪傑

◉松田源治君等は、『和田は落第博士サ』と謂つて揶揄してゐたか、併し生ける人物手腕の一切は區々一片の答案紙を透して判ずることは出來ぬ。試驗は死んだ書物に載つてゐる事物を巧に暗記してゐたら夫れで百點だ。果然事務官としての君は存外評判が好く、且つ如何なる場合にも人間の底を顯はさないのは感心だ

◉厭に隱居じみた趣味を持つた人で、酒も餘り遣らねば、一方への發展も更に期しない、一時は釣を遣つてゐたが、如何云ふものか薩人たる君は土佐の魚に振られる、植木事務官のお仕込みで碁も併べて見たが是亦到底笊碁の外に出でず、詩

を作ると云ふ話もあるが、未だ曾て一作だも世に聞えたものがない、目白を飼ふては鳥屋に瞞され、清水源井君等と古物屋から古出及を引ッ張り出して來ては藁束を斬つたりするやうな狂氣染みたことをやり、鋏を握つては生木の自然を害して見たり、朝咲いて晩に萎るゝ朝顏を作つて悅に入つたりする所などは偶醉居士の名に負かずして、越嶺居士の乘り越ゑ主義などゝは餘程其の趣きを異にしてゐる丈け、夫れ丈け紙君に忠實なる方である、細君に忠實なるが如く職務に忠實なる曉には何時かは知事になれるだらう、轉任したら丈夫な子息も產まゝゝであらう兎に角心配することはあるまい

川田小一郎

◉今は昔、維新の前のこと也、高知市外は古新地の片隅に、夫婦相對して疊表を織る者あり、家に檐石の貯へなくて、而かも多數親戚の厄介者を養ふて、更らに意に介せず、誰れか知らん、此の疊屋こそ後年の日本銀行總裁男爵川田小一郎な

らんとは、彼の屋數の垣根に一株の柿あり、附近の兒、其の實を取つて食ひ赤痢に罹る、爾來柿の實の熟するに先だち、彼れ悉く之を取り去つて、復た一顆を留めず、曰はく、人の子を傷ふに忍びすと

◉麻布樣と稱する山内の一族、德川の瓦解に際して歸國、宗臣二百餘名を古新地に住はしむ、言語の東京辯たるを以て、藩の子弟之を嘲笑し、時に喧嘩を吹き掛く、一日例によりて罵詈する時、麻布組みの子弟大擧來り襲ふ、中に大人の混ずるあり、是れ腕白頭の横山某、少年乃ち馳せて川田の邸に入り、有り合はせる鐵砲を取り、ズドンと一發す、是に於て大騷ぎとなり、麻布組みの屈强の者等、黑山の如く押し寄す、某惶惑川田の納屋に隱る、小一郎乃ち某に向つて其の暴を攻め、改悛の言を聞くや、出でて雲霞の如き詳集を家に招き、談判頃刻、事忽ち解くるを得たり、彼は應酬に於て、獨得の才を有せし也、吸江の青柳橋大に破損せしことあり、架換の議容易に決せず、當局の吏、川田の才を識り、彼をして安藝に赴き、岩崎彌太郎に詢らしむ、小一郎が岩崎の知遇を得しは、蓋し此の時なりとす

◉岩崎に雌雄といふ語あり、雌は川田にして、雄は石井也、石井は非常の手腕家にして、表面の事は大小となく、岩崎に代りて之を所決す、然れ共顯官に對する請托は云ふ迄もなく、諸般外交の事に至つては、川田に非らざれば辯ぜざる也、川田之に當れば、如何なる難局も、所理せずとふことなし、彼が折衝の才や、蓋し天禀也、彼れ容貌魁偉にして、態度甚た應揚、想ふに事業界に於けるウイッテ耶、非耶(明治四十三年)

鐵彌

◉東京は大久保の閑雅幽靜なる邊に高千穗小學校を設立し、孜々として敎鞭を執りつゝある文學士川田鐵彌、亦た一個の傳ふべき人物たるを失はず

◉今でこそ學士が箒を以て掃くほどに出來て、往々就職難の嘆を發する者があれども我が鐵彌が赤門を出でし當時は、其の金箔は未だ然く剝落せざりき、彼にし

て役員となり若くば教員ならんとせば、相當の地位を贏得て而も極めて安樂なる生活を爲し得べきに拘はらず、彼が此れを擇ばずして理想的小學校の經營を以て自ら任じたる、蓋し見る所ありしなり

◉高千穗小學は實に貴族的小學なり、上流社會の子弟を教育すべき學校の需用を充たすべく設立されたるものなり、お乳母日傘の教育は由來馬鹿殿樣の生じたる所以にして、如何に學校の形式を粧ふにもせよ、特別の保護的教育が果して聰明なる貴族を造り得べきかは多大の疑問に値ひす、揉まれてこそは匂ふ茶蕗、社會の上流に在る者ほど益々平民的教育を受けしむるの必要はあらざるか、西洋には往々此種の學校ありと聞けども、吾輩は其の遂にノンセンスたるを思はずんばあらず

◉遮莫、處世法として彼は確かに成功せるものなり、私立學習院の益す隆盛に赴むくを見て彼の經營の如何に優れたるかを知るべし、彼は利口者なり、中々隅へ置けぬ男なり

川崎幾三郎

◉東京商業會議所會頭澁澤榮一は實業家の巨頭なり、銀行會社の宗祖開山なり、彼の聲望の隆々たる、一時は百餘の重役を兼攝せしことあり

◉我が川崎幾三郎も、其の高知商業會議所に會頭たる點に於て、其の多くの事業を興し多くの重役たるの點に於て、之に酷肖せり、彼は實に土佐の澁澤榮一なり

◉土佐人は遠慮なく云へばシミッタレなり、非事業的人間なり、高知市よりして東西各郡に亘りて歷觀するに、相應資力ある者に乏しからず、小殿樣然として先祖代々の骨をしゃブる者はあり、高利を貸して貧乏人をイジメる者はあり、奮然起て利源の開發に從事し、進んで以て國力の涵養に資し、退ては以て自家の富を增殖せんとする者に至つては、晨星の寥落も啻ならずして、獨り川崎あり

◉土佐人が政治に狂奔して復た生產の事を顧みざる時に當り、川崎が冷然として牙籌を取り一意實業世界の開拓に從事せしは、具眼の士に非ざれば爲し能はざる

所、彼も亦た一世の豪と云はざるべからず

◉惜むべし、蕭曹文なし、彼をして今小しく學問あらしめば、其の識見を超邁にし由て以て實業界の指導に些の遺憾なからしめんものを

◉澁澤の實業界に貢献せる所以は、唯だに其の事業を發起せし爲めのみならず、よく經濟界の羅針盤となりしに在り、而も我が川崎は之を能くせず、之を能くせざるは學問の力足らざればなり

◉或は曰く、土佐人の短所は其の理窟ッぽきに在り、而して此の理窟ッぽき性質は生學問のあるが爲め益す發揮せらる、川崎は實業家なり、而も土佐の實業家なり、土佐の實業位を指揮するに學問もへッタクレもあつたものに非ずと、其れ亦た然らん

◉澁澤をして官界に在らしめば、夙くに大臣宰相たるべかりしなり、川崎をして政治上の野心あらしめば誰れか其の代議士たるを否まん

◉然れども澁澤のエラキ所が官冕を一擲して顧みざるにある如く、川崎のエラキ

所も政黨に浮かされざるにあり

◉温乎たる其の貌、悠揚逼らざる其の態度、彼は好個の紳士なり、聞く澁澤は論語通の稱ありと、彼亦た何か私淑する所あらん、眞逆かヨサニイ節には非ざるべし

垣内正輔

◉お煮締のやうな嬪鼻揮も、一晩鴨河の水に浸けて置けば眞白くなること受合なり、上京土佐人のおナン纖が双子織となりチョル、キニ、ネヤの方言がタカデメツソウ東京化すること、復た何ぞ怪しむに足らんや

◉滔々たる模倣の世の中、爭ふて氣取合ふ今日、獨り我が垣内正輔のみは何處迄も土佐人の特色を失はざる一人なり、數十年久しき間土佐を離れて而も言語風采依然たる垣内の如きは蓋し稀に見る所なるべし

◉在京の縣人一夕相會して私宴を張る、禮に始まりて亂に入る頃は、ハヤ箸拳處

々に行はれヨサコイ節續出す、唱へて『土佐はよい國南をうけて薩摩嵐がゾヨ〳〵と吹く』に至るや、忽ち破鐘の如き聲にて阿呆云ふなと大喝する者あり

◉と見れば垣内が滿面朱を濺いて突立てるなり、驚き呆る〻衆人を睨み付けて曰く、自分の耻を吹聽する馬鹿者奴、豈に薩摩の下風に立つ土佐ならんや、薩摩嵐は過まりなり、夏は嵐がソヨ〳〵と吹くを轉訛したりと、一座是に於て大に白ける

◉彼夙に英學を修め又た最も演說の必要を唱ふ、馬場辰猪、大石正巳と相携へて大に民論の皷吹に努むるや、彼の快辯は非常に世の喝采を博したるなり

◉彼の半面は政論家にして半面は教育家なり、明治義塾三田英學校は當初彼の教鞭を執りし處、其後杉浦重剛が大學豫備門長を辭して東京英語學校を創立するや、垣内は松下丈吉宇都宮平一志賀重昂の徒と共に教授の任に當れり、一時は佐賀縣立中學校長となりしも再び日本中學校に歸り來りて今日に及べッ、日中は東英の後身なり

◉彼が最も政治上に活動せしは井上の條約改正當時なり、歐化主義の吹き荒みし當時なり、土佐粹の保存論者なりし彼がまた日本粹の保存論者なりしこと怪しむに足らず

◉されど彼は決して保守主義の人物に非ず、彼の國粹を貴び地方粹を重んずるは其の天性の剛直にして輕佻浮華を忌むこと蛇蝎の如きに因するなり

◉彼の剛直なる一例は、曾て佐賀中學に在るとき、時の知事安立綱之と激論し、長拳を振つて之を張り倒せしに徵するを以て見るべし

◉大石正巳に狎妓あり幻大夫と云ふ、再三大石の邸に押掛け河誓山盟の約を果さんことを迫る、大石辟易而も如何ともするなし、乃ち垣内に依頼して之に當らしむ妓來る、一見垣内の風采態度に驚き却走す、曰く此の如き壯士を對手とす如何の禍を見んも知るべからずと、一時傳へて以て笑柄と爲す

◉嗚呼純乎として純なる土佐人の垣内正輔、彼れは遂に宿痾を以て東京に逝けり時は本月三日午前七時、享年五十四、惜むべき哉(明治四十四年稿)

横山又吉

◉若し土佐に眞個の教育家があるならば、其の人の名は屹度横山又吉といふに違ひない、自分は今迄縣下の教育家といふ教育家は大概調査して見たが、不幸にしてまだ横山君の如き確りした教育家を見當らぬ

◉今の教育家の缺点は、教育上に於ける自己の主義信念が無く、徒らに法令や、文部當局の訓示などに囚はれて了ひ、宛かも水のまに〳〵漂流する浮き草の如く毫も獨立の定見抱負をよう施さないことである、こんな調子では迚も生きた教育の見らるゝものではない、そこになると横山君は流石で、君は上長の訓示や法令などに從ふことは無論從ふものゝ、決してそれに盲從をしない、必ず之に自己の意見を加味し、主義信念を塩梅して實地に活用するのである、要するに君は教育家といふ前に於て先づ人間なるものを解し、青年なるものを解し、學校なるものを解し、社會を解し、而して最后に教育なるものを知り、教育家なるものを知つて居る、で君自身の性格は、寧ろ偏狹に近い程であるけれど、決して型に嵌つた四角四面の教育をしないのである、何所かに一種飛び放れた所がある、不羈豪放な所がある、故に商業の卒業生には小ヅンだ人間が少ない、皆覇氣滿々といふ風で、各所に男性的な活動を試みて居る

◉人によると横山式の教育主義は一面に於て放縱な生徒や、空想めいた生徒を造るの危險が伴ふと謂つて批難するが、併しそれは例の議論家の空論で實際そんな心配のある可きものではない、仮令あるにしても、多數者を生きた人物たらしめる爲の僅かの犠牲であつて全生徒の腦髓を殺して了ふ樣な教育よりは遙かに善良であり、且つ効果があると思ふ

◉それから君が卒業生の世話をよくするの一事に至つては只々感服の外はない、何所かへ奉職をし度いといふ者があると、君は責任を負うて當人の希望を充してやる、而かも自ら保証人となつてまで周旋の勞を取る、曰はく、横山は自身で保証人になれぬ樣な生徒を賣り込みはせぬ、又たそんな生徒をば作つてゐないと、

だから一度君の周旋で身の振り方をつけた者は、皆其の恩に感じて眞面目に仕事をなし、他の商業學校の出身者よりも遙かに評判が好いといふことである、横山君の如き敎育家は全國でも餘り多くは居まいと思ふ

依岡觀

◉觀音樣の申子として、居常菩薩の金像を放たず、朝夕觀音經を讀むことを怠らざる依岡觀君は、今や幡多郡政界に於ける一大注意人物となり、其一擧手一投足は著しく郡民の神經を騷がせゝに至つたやうだ、君は歸往四十有余ケ年の境涯よしや失意不平等のそれを以て葬られたとするも、亦實に當代の流行兒たるを失はない

◉君は有名な資産家である、土佐の大金持ち(必ずしも土佐に限らず)と一云へば大概阿呆か然らざる迄も其の智、其の明、遂に帳算盤以外に及ぶ能はざるの多きに、君が獨り其の輩に倣はず、帳算盤は勿論、一切の方面に向つてよゝ通曉し、且

つ藩幡の邊りに住み乍ら、毫も新智識に遠ざかつて居ないのは、龍串の絶景と共に幡多の二不思議といふべく、流石は觀音樣の申し子丈けあるといつてる者がある

◉吾が輩は君が其れ程までに出來た人物であるか如何かは知らない、然れ共又た君が縣下の長者中一等利巧で、比較的よゝ事務に通じてゐることを否定し能はない、是に於てか我輩は君の用ゆるに足るといふことを認めざるを得ぬ、と同時に其の一擧手一投足の尠なからず郡民の注意を惹くの必ずしも偶然でないと思ふ

◉君は長谷塲純孝氏が第一回目に土佐へ遊説に來た昨年の六月、思ひ切つて政友會へ投じた、幡の國民黨が我が依岡君を取り逃したのは眞に一代の失策で、機敏な仝黨にも似合はぬ詰であると共に、君を奪ひ取つた政友會は空前の大出來野呂間な仝黨にも似合はぬ次第である、併しながら政友會は此の大寶物を手に入れたきりで、一向用ゆることをしないのは甚だ心細い感じがする、そも依岡君が國民黨原の中から單身政友會へ踊り込んで來たのは、要するに從來國民黨が君を冷遇

し、君の材を用ひなかつた、換言すれば君を除けものにした結果であつた、人は感情の動物である、主義主張を把持するものと雖も時に感情に依つて動かぬとも限らぬ、然るに君を迎へ込んで以來の政友會は、君を長者議員に推す可くして推さず、君に黨務を諮る可くして而も諮らないといふのではないか、若し何時迄も此の筆法で行つた時は、君が國民黨を捨てゝ政友會へ入つたよふに、政友會を捨てゝ他へ走る樣なことのないとも斷言が出來ぬ、依岡氏如何に時務を知るとも、豈に又感情の赴くが儘に赴くなきを必す可けんやである、聞が如くんば依岡君は今年の縣會議員選擧に、中立を標榜して起つとの說もあるらしい

◉君が果して縣會議員の如きちつぽけな野心を抱藏して、小い競爭に腐心するよふな人であるか如何かは知らないが、而も風說の起る所、昨今政友會と君との間の電流の如何に薄弱であるかゞ解るぢやないか、政友會たゝもの今にして確かりせずんば、後日屹度噬臍の悔を招くだろふよ、吾輩は依岡君の人物と資產と而して其の勢力との侮る可からざるを知るが故に、政友會の爲めに敢て茲に此れを云ふのである

高原伊三郎

◉今を距る十年前迄の、縣下に於ける政治家中の流行兒は、高知新聞社の編輯局裡に燻りし富田幸次郎なりしが、富田が此の驚異す可き人氣を土台として、幸運にも中央政界に躍り出でしより、從來富田に向つて注かれたりし人氣と好評とは今や退いて公判通ひの高原伊三郎一人に向ふに至れり、知らず此の新らしき流行兒高原伊三郎とは如何なる人物なるや

◉內務省衛生局長に轉じたる前本縣知事杉山四五郎、曾て高原を評して曰はく、彼や圓滿なるが如く圓滿ならざるが如く、一僻も二僻もあり現時の高知縣會議員中に於て兎も角も未來ある者の一人なりと、實にや彼は生でも燒いても喰ゐる男にあらざる也、一見、肅洒たる風流才子かと思へば、機略縱橫、好むで奇策を弄び、圓滿なるが如くにして意外に圭角あり、表裏反覆、進退行藏共に變通

自在、得て端睨す可からざる者を高原伊三郎と爲す

◉凡そ進新の法曹家は、多く理想に馳せ、他と相融和せざるの風あるも、唯り高原に於て然らず、來る者は何人なりと雖拒まずして之を抱容し、說は何者の愚策なりと雖も力めて之を傾聽注視す、其の態婦女子の如くにして、實は壯漢也、快男兒也、故に彼は政黨に組するも、下元大西の如く、自我を飽く迄も固持することを爲さず、一旦必ず他を容れ、やがて更らに採りて以て自家の用を爲さしむ、其の所爲や譎、其の意や獪、蓋し之を嚴正なる道德的方面より觀察すれば醜狡惡むべしとせむも、由來處世の術は斯の如きものを認めて以て巧みなりと爲すを奈何特に掛け引き一点張りの關係よりなる政黨としては硬直竹を立てたゞが如き大西下元等よりも變通よく相寅緣し比周し相融和する藤蔓の如き高原を歡迎するは自明の理たらずむばあらず、加ふるに辯護士としても大西、下元に比し年輩、時代共に幾分か先輩株の位置に在り、是れ彼が現時の大正倶樂部に於て重用せらるゝ所以にして又た一般社會の大西、下元等に比して若干氣受け宜敷き理由ならざるか

◉彼れ夙に代議士たらむとするの野心あり、昨年の総選擧に方り自ら安藝、吾川の二郡に跨つて根據を定め打つて出でんの目論見を立てたりしも、黨の先輩に遮られて果さず、心中私に平かならざるものあり、辯護士團と相率ひて脫黨す可き陰謀あるを傳へらるゝも、眞僞分明ならず、恐らくは例の流言蜚語にあらざるなきか、唯だ、大正倶樂部が桂公等の率ゆる新政黨に赴く日あらば、斷じて倶樂部と手を分たむのみと公言しつゝあるに徵すれば、彼は大正倶樂部員にして倶樂部員ならざるやの觀なきにしてもあらず、今後に於ける彼の言動振りこそ一段の見ものなれ

田岡嶺雲

◉明治十八年の秋、自由大懇親會を高知城南の鏡川原に開く、唯見る平沙慢幕を張り、幾千の會衆ウヨ〳〵として其の中に集れるを、宴に正酣にならんとする頃

紅顔美少年あり、年齢僅に十二三、場の中央なる演壇に突立ち聲を勵まして自由民權の大義を說き、政府の專制を干涉とを痛罵す、聞く者感奮せざるなし、是れ此の寧馨兒を誰と爲す、曰く我田岡嶺雲

◉嶺雲の大學を出でて『日本人』『江湖文學』『青年文』等に執筆するや、其の奔放不羈の文章と、悲壯慷慨の思想とは、浮華纖麗なる當時の文壇に一頭地を拔きて、早くも青年學生渴仰の中心となりたりき、彼の活動の最も潑々たりしは其の中國民報主筆時代なりき、新聞記者としての彼が、果して完全なる資格を具備せるや否やは暫く措くも少くとも彼が富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざる男兒の眞骨頭を發揮せしは此の時代にして、而して其奇貨を買ひしも亦た此の時代なり

◉彼れ現代社會の中庸を求むるに汲々たるに慊厭たるものあり、曾て曰く予に万金を與へよ一夕大に乞食の徒と會し彼等の欲する所を擅まゝにせしめん、亦た快ならずやと、奇矯の言正に彼の性格を見る、彼の病餘の近狀は詳かならず、唯

だ讀賣紙上、頻りに國母の義に關する考證の發表せらるゝあるのみ、意ふに此の如きは、彼の長所に非ざるべし、彼の本領は、蓋し別に存するなり、彼は啻に學究として不適當なるのみならず、政治家としても不適當なり、何となれば、彼の文章は光焰萬丈にして經綸甚だ雄大なれども、立論、動らすれば粗笨畢に書生の橫議たるを免がれざればなり

◉遮莫、彼の胸中には活火不斷に燃えつゝあり、彼にして詩人たらば、青年の心情を憧憬せしむべし、彼にして哲學者たらば、よく人性の本義に肉薄し得べし、一代の不平兒贏得る所果して幾ばくぞ、彼の才と筆と惜むべし、而して皎潔雪の如き人品に至つては特に惜しむべしと爲す　（明治四十三年）

田村文四郎

◉國亂れて忠臣出で家貧しくして孝士現はるゝ、譬へを茲に假名手本に引くに及ばず、土佐國民派の末路は、明かに此言の千古誣いざることを證せり

◉一時は多數を縣會議場に制するの勢力ありし舊國民派も、自由派の爲めに壓倒されて孤城落日僅かに殘喘を保つに當りてや、賴みなきは人心、脚下の明るきうちにとサッサと遁出したる小野九太夫親子も隨分多がりし中に、獨り田村文四郎が踏止まりて惡戰苦鬪、刀折れ矢盡きて而る後已みたるぞ雄々しき

◉國民派に機關新聞あり、高知日報といふ、黨勢の凋落に從つて積衰積弱復如何ともすべからず、而も機關の無きは即ち黨派の無き也、是に於て我が文四奮然として起ち、自家の有らゆる資財を提供して以て新聞の經營に充てたり

◉大厦の將に倒れんとする一木の能く支ふる所に非ず、彼の盡瘁にも拘はらず、日報の運命は國民派の運命と共に、遂に其の最後に到達するを余義なくされたり而も此時に於ける彼の武者振りの如何に勇猛にして又た如何に悲壯なりしよ、肱を奮つて一呼すれば創病皆起つと古人の云ひけん如く、實にや田村の熱誠はよく油の切れしローラを廻轉せしめたるなり

◉彼は近代の土佐が產せし最も意志の强き人物なり、彼れ逝きて十年に垂んとして國民黨再び土佐に興る、而して或る意味に於ては彼の與黨の復活なり、恨らくは彼をして生て之を目睹せしめざるを

◉國民黨支部の成立は必ずしも片岡健吉の墓を展するを要せず、而も高知新聞新築社屋の落成は決して田村文四郎の靈に告ぐるを忘るべからず、蓋し高知新聞社の所在地は舊の高知日報社の其れなればなり

◉其日報の最後まで其のペヌトを盡せし記者に藤昌樹と云ふ者あり、今は大阪日報に在り、紙名の同じく日報たるも亦た奇ならずや

竹村與三兵衛

◉江月齋一橋と云へば、華道に志ある人の外は知る者なからんも、竹村與三兵衛と云へば、當年政界の有力者として隨分と名高かりしものなり

◉思へば二た昔に垂んとす、土陽新聞が其の獨占の威を挾さんで、專肆暴橫、往々自由黨機關の實を失はんとするや、我が竹村は大に之を憤慨し、實業家の錚々

たる者を團結して社長山田を排斥し、事成らざるに及んで別に一新聞を發刊したり

◉彼の盜せし新聞は、不幸久しからずして廢刊の運命に遭遇せしも、而も實業家の政治的勢力が認識されしは實に此時に始まる。彼は實業界の陳勝吳廣なり

◉爾來彼れの勢力は陰然として市の一方に蟠蟄し、選ばれて市會議員となり縣會議員となり、人をして其の將來に屬望せしめしに、何ぞ圖らん彼は忽ち急激に勇退し盆栽の培養と華道の皷吹との外復た政治のせの字を言はざるに至らんとは

◉彼は正風遠州の家元故人貞松齋一馬の高足にして、縣下同派の總取締たり、華道奬勵會の東都に起る、特別名譽會員に推さるゝ者全國を擧げて僅に數名而も彼れは其の一人なり

◉盆栽同好者の設立に係る樹石會、亦た實に彼の卒先盡力せる結果なり、一樹一石、天地を尺寸の間に縮むるに至つて、誰か又た雨覆雲翻の政治道樂を顧みる者あらんや、彼の退隱せる宜なりと謂つべし

◉英雄回首即神仙突、當つて始めて分るやうでは駄目なり、我が竹村は其れ機を知る者乎

田村逆水

◉早稻田大學の出身者中、代議士になつた者が彼是四十名に達したかとで、大隈伯は『如何だ素晴らしいものだらう』などゝ大變悅に入つて御座るさうだが、今度同伯や、田中伯等の推薦で高岡郡を根據として代議士の候補に起つた逆水田村全宣も矢つ張り早大の出なのである、知らず彼は隈伯の所謂素晴らしい勢の中へ這入り得るや否や

◉彼は早稻田出ではあれど政治科でなくつて文科の方だつた、卒業後は小說を書いて見度い、新聞記者になつて見度い、位の希望を懷いて新土佐新聞に入り、小說兼三面記者となつて頻にり筆を走らせて居たが、余り評判の好い方でもなく、且つ其の人物に於ても、敢て重きを置かれては居なかつた、其の後如何した動機

からか、發心して上京し、讀賣新聞へ這入り同時に從來の軟派から脫出して硬派に轉じた、然し之れは彼れ自ら好むで轉じたではなく、境遇が彼をして轉せしめたのであつた

◉而かも彼の爲には夫れが反つて幸福の基となり、彼は故本野前社長や高柳現社長等の信用を得て、トントン拍子で出世し遂に政治部長なる重要の位置を與へらるゝことになつた、勿論軟派を固守して居たなら、今では如何なる大家になつて居るか夫れは判らないけれど、彼の姓格理想などは寧ろ政治家向きである樣だ

◉彼の人相と体格とは極めて男性的で、又た稜々たる氣骨と覇氣とがある、從つて頭が固く、ド腰の强いことゝ來たら話にならぬ、お負けに口が叶ひ、云ふ所存外條理が立つ、後藤新平男が鐵道院總裁時代に東京の各新聞社から一名宛案內して滿鐵の視察を乞ふた際、讀賣から行つた者は彼で、當時彼の對滿鐵談議は堂々たるもの、一行中優に一異彩を放つて居たと云ふことである

◉彼年齡今年三十六、氣骨あり覇氣に富んだ彼れは、隨分亂暴もやつた、宴席で

人の頭をポカンと遣つたり、麥酒壜で撲つたり、撲られたりしたことは只だの四五十遍ではゐるまい、けれ共好配遇を得てからは大分落ち着いて、今は處世術にのみ苦心をする當世才子になり濟して居る、比較的知惠のある所から月給の半額を割いて家賃に打ち込み、大きな家を借つて名士と相往來する、折々は岩淵なる田中伯の別莊をも訪ふ、大隈伯の機嫌をも取ると云ふ塩梅であつたが、今や到々兩老伯の睾丸を握り詰めたものと見ゐる、此所等の手腕は一寸富幸式と云つて好からう

◉彼が果して代議士に當選し得るや否やは頗る疑問であるが、憲政日に月に腐敗して年々彌次馬連が議會に飛び出すのを見るに見兼ね『是れ程代議士の價値が下落した場合に乃公にして代議士たる能はずんば最早乃公の代議士たる時代はあるまい』と豪語して居たのは久しい前のことであつた、兎に角今の世では代議士として議會へ送り出しても余り恥かしくはない人物だ　（明治四十五年稿）

中野寅次郎

◉土佐は議論の國である、土佐人の理屈と、云ふことは、名産、製紙鰹節の夫れ等より遙かに著聞して居る、從つて古來日本の雄辯家なる者多くは土佐から出で若くは土佐人の感化を受けた者が多い

◉即ち坂本龍馬、後藤象次郎、板垣退助、馬場辰猪、大石正巳、片岡健吉、植木枝盛の人々は純粹の土佐人で、河野廣中、杉田定一、松田正久、栗原亮一、日野國明の如きは、非土佐人の土佐人と見て差支へがない、土佐は斯く辯說に富むだ國で、土佐人程よく喋れる人種は珍らしいものであるが而かも我が中野寅次郎の如き雄辯家は純然たる土佐人中にも將た非土佐人の土佐人中にも、曾て出て居ない樣に思ふ

◉彼は殆んど先天的の雄辯家であつて自由民權論の喧かりし頃には彼はまだホンノ廿四五の、白面の一書生に過ぎなかつた、されど彼が自由黨の名士に隨うて、

各地に試みた演說は、遙かに先輩の夫れよりも受けがよく到る所に大喝采を傳し演說は中野に限るとは、當時一般の定評となつて、彼の出席する演說會場は何時でも立錐の餘地がなかつた、而して其一度東京に於て、得意の快辯を振ひ、大に自由民權の爲めに氣を吐くや、斯界の曉將尾崎行雄は、彼を評して『日本一の啼き鳥也』と謂ひ嘆賞措かず、爾來中野が尾崎の知遇を受けたことは尋常でなかつた、否な現時に於ても二人の關係は決して昔に渝らない、是れ蓋し中野の人物に取所があるにも因らうか、其の主たる原因は、彼が『日本一の啼き鳥』たるに基けるは爭ふ可からずである

●其の後心機一轉、意を政界に斷ち實業界の人と爲つてからの彼は暫く口を緘して、自ら舌鋒を抑ゑて居たが、過般土佐に立憲青年會の生るゝや、彼は青年會の請ひを納れて歸縣久し振りに雄辯叱咤、縣下の人士を熱狂せしめ、各候補者をして顏色なからしめ、折角の花婿よりも介添たる彼が人氣を奪つて了ふの奇觀を呈した

◉彼の演說は滔々として一点淀む所のないのみか、音吐朗々、言々亦熱烈にして巧に抑揚波瀾の妙を極むる点に於て、到底島田や大石等の及べない長所を有する、勿論其の論據の確なことや、識見の豊富なることやに於ては、彼れ以上の人間は多からう、然れ共イザ演說となつては、未だ彼れ位い快辯の振ひる者……主として議論に於て……を見當らぬ、次の総選擧には是非彼を出して此の日本一の啼き鳥を、本場で啼かして見度いものだ

中島氣峥

●魯中連先生は天下の士なり、中島氣峥も亦た新聞社會を股に掛けて横行する所謂天下の士なり

●天下の士とは實は無宿の浮浪人なり、乃ち浮浪人なれども、確乎たる信念を有し、之を貫かんが爲めに行かざる可からざるに行き、止まらざる可らざるに止まる是れ即ち天下の士たる所以なり、魯仲連は秦を帝とせざるの信念を有したり、然

して我が中島は國家主義の信念を有す

◉其昔し國民派のチャムピオンとして高知日報に據り自由黨を相手に奮戰したる彼は或は、日本新聞に、或は萬朝報に、或は東京日々新聞に客遊し、現時は國民新聞に在つて相變らず辛辣の外交手腕を振ひつゝあり、豹變せる君子德富蘇峯は果してよく彼の隨喜渇仰に値するか、あらず

◉蜂は蜜を尋ねて行くなり、彼は國家主義を鼓吹せん爲めに筆を載せて遊ぶなり遇へは即ち止まり、遇はずんば即ち去る天下の士たる亦た快ならずや

◉痛飲淋漓、得月樓の大廣間縣下の政客を集めたる眞中に立ち、ジーヤ々々と火鉢に小便して氣を吐く虹の如かりし彼が酒を禁じ煙草を禁じ肉食を禁じ節を折つて外國語の研究を始めたる、以て其の志尙の凡ならざるを見るべし

◉古竹老衲の詩に曰く、手熟畫稍俗、才衰詩却圓、人物に於ても豈に獨り然らざらんや、中島在焉

上田開馬

◉凡そ文明の利器なる物は、後から〳〵と立派な趣向を凝して出て來るから、餘り慌てゝ先きに出來た奴を奪ひ取る樣に手に入れなく共暫く不自由を忍び後より出で來る完全で便利な方を待つて買ふのが幾ら氣が利いて居るかも知れない、論より證據、土佐人抔は今尙ほ鐵道々々と八釜敷く騷いで居るが、何ぞ知らん、西洋諸國には空架索道と謂つて、鐵道よりも遙かに輕便な運輸交通の機關が普及されつゝあつて、鐵道の如きは將に十九世紀に於ける文明の遺物として取扱はんとするの形勢ではないか、而かも此の空架索道は上田開馬君等の手によつて我が土佐の田舍に迄架せられんとするの實況である、現世紀は空中研究の時代だ、俯して地上の狀態を考ふ可き時代に非らずして、仰いで天空の利用方法に腐心す可き時代である、土佐人抔も古めいた鐵道の事よりは新らしき空架索道に就て研究を試むべきである

◉議論は姑くお預けとして、上田君等の空架索道計畫に就ては、政府の役人も聊か魂消たであらう、勿論日本國內でも他に既に類例のないではない、殊に上田等の出願區域は僅かに高知本山間に過ぎぬ、然れ共鐵道熱中時代の土佐人にして一躍空を辷るの計畫を試むとは、少しく破天荒ではないか、元來斯樣な思ひ切つた事は上田君でなくば迚もよう思ひ付きもせねば、又た實行の勇も出ない所だ

◉總じて軍人上りの人は勇敢の氣に富み、萬事其の行動が男性的であるが、上田君はそれに着眼點が奇拔で、而かも敏速である、彼の徵兵保險に手を出したなどは明かにそを證據立てゝゐる併し之を他の人が經營したと假定して果して上田君同樣日本全國中に於て、第一位の好成績を占めて居るか如何か、太甚疑問と云はねばならぬ、他から觀た所の君の徵兵保險は、何の苦もなくトン〳〵拍子に成功した樣に思はるゝが、君が今日に至る迄の經路に逆つて考ふれば、君と雖非常な困難をしてゐるに相違ない、其所を靜ッと目をつむつて漕ぎ拔けた處が上田君たる所以即ち上田君の人一倍勇敢の氣に富むで居る所である

◉次に工業學校は如何、あの思ひつきなどは如何にも奇拔で且つ機宜に適したものではないか、後日種々の問題を惹起せしめ、不幸君は其の終りを全ふすることは出來なかつたが、其の奇拔なる最初の思ひつきのお蔭で危く廢滅に歸せんとした土佐の漆器事業の如きは俄然として、新芽を吹き出すに至つた、君は一面に於て産業界の恩人である

◉要するに君は、其の眼光の鋭きが如く着眼點も亦非凡で、之を抉くるに活潑々地の而かも磊落の氣性を以てするの才物で、殆んど行く所として可ならざるなきの慨がある、彼の空架索道の如き、果して成功するや否やは未定ではあるが、君の周密なる智慮と、堅忍不拔の勇と熱心とを以て當らば、蓋し必ず成功疑ひなしであらう、吾輩は切に其の成功して、不便なる土佐の交通界に利益を與へ、以て産業發達の上に資せられんことを望むでやまぬ

宇田友四郎

◉吾輩が土佐に於て、あの人を明治維新前後の人たらしめばと思ふ人物が二人ある、一人は葛目友君で、一人は宇田友四郎君其の人である

◉葛目君の氣骨と膽略と、其の活動性とを以て維新當時に處せしめたなら、必ずや林有造翁位の事業はやつてのけ、今では前何々大臣の肩書をば優に之を持つて居ることだつたらう、若し夫れ宇田君に至つては、其の型が如何しても故岩崎彌太郎式で、洵に當世に於て容易に得難き人物といはねばならぬ

◉凡そ偉大なる事業家は、非常なる觀察眼と、非常なる勇氣とを持つて居る、葛目君のことは姑く措き、宇田君も非常なる觀察眼を有し、同時に非常なる勇氣を持つて居る、彼は最初からの傑物ではなかつた、或る一定の處世の階段の出來る迄の宇田君は、無論學問もなければ大した資産のあるでもなく一商事會社の普通の事務員に過ぎなかつた、然れ共彼が一度一定の足場を造るや、彼は巧みに此の足場を利用して、あらゆる方面に向ひ其の殆んど獨得ともいふ可き活眼を開いて確かに觀察し、苟も有利有望の事物ありとせば、萬難を排して其の事物に手を出

し必ず之を自已の手中に收めねばやまなかつた、そして夫れが悉く圖に當り、彼は瞬く間に儕輩を拔いて壯年早く實業界に於ける一方の雄將となつたのであつた世には機敏な觀察眼を有する者に乏しくない、而かも多くは同時に非常なる勇氣を備へて居ないので、肝賢の目的物は眼前に横はると雖、之をよう摑まないが爲めに十二分の成功を收むることが出來ぬ、是になると宇田君は流石に豪い、彼は決して物と時とに惧れない、當つて碎ける、是れ實に彼が處世の要諦で、彼は始終此の信念に基いて活動を怠らないのである、故を以て彼は隨分人の意想外の事業を興し、意想の儲けをなす譯だ

◉土佐にも手腕ある實業家は多い、然れ共宇田君の如き一種卓絕した人物は餘り多く見當らぬ、彼をして若し故岩崎と同時代の人たらしめば、彼は蓋し岩崎以上の成功家として、或は日本の富を岩崎と共に兩分して居たかも知れぬ、惜しい哉此の人平和の時代に處し、而かも狹隘なる日本の天地は、我が事業界に於て稀れに見るの奮鬪兒宇田友四郎君をして大に其の驥足を延ばしむるの餘地がない

信清權馬

◉政友會高知支部は、今次の縣會議員補欠選擧に方り、何時になく國民黨支部よりも先に候補者を立てた、而かも其の立てたる候補者が、信清權馬君と云ふので一層世間をして意外の感を喚起せしめた

◉信清君を一言にして評すれば、先づ『やりや』といふ方が當るだらうと信ずる、君は相當學問もある、智慧もある、辯才もある、江陽學舍なる私學校を興して、自ら其の舍長兼ねたり敎師、と云ふ地位にあれど、君は普通の敎育家の如く世間知らずの人形ではない、で君の敎育主義なるものも、大体に於て囚はれて居ない窮窟でない、聊か飛放れた一種の江陽學舍風を爲してゐる所は稱す可しである

◉それから君は多少の奇骨を有する、柳に雪折れなしと云ふやうな流儀は、君の最も忌む所で、自已の所信は飽く迄も貫徹せねば已まぬ、或る程度迄は善を善とし、惡を惡とせねば承知の出來ない方である、故に時としては腹をも立てる、涙

をも流す是等の事に五分刈の彼の頭何時でもクシャミをして居さうな君の顔などがちやんと証據立てゝゐる

◉人間は神とは違ふから彼も亦多少の短所はあらう、欠点はあらう、然れ共其の手腕、人物、抱負などは今の縣會へ押し出して行つても敢て遜色はあるまい、元來今の政友會には新人物が乏しいから、彼が首尾よく當選したならば、彼は蓋し余程持てるだらうと思ふ、あれ位の腕であると或は支部内の一勢力となり得るかも知れぬ

◉彼は多年余り世間と交渉しないで隱遁の風を裝ふて居た爲に候補の名乘りを揚げるや否や存外評判が好いと云ふことだ、暑中隨分御苦勞ではあらうが、然る可く運動して捷つて呉れ玉へ　（明治四十四年稿）

楠瀬幸彦

◉木越陸相は山本内閣の方針に依り陸軍の整理を斷行せんとした、處が端なくも

長谷川參謀総長より強硬なる抗議が起つた、陸相は其立場に窮して、遂に辭表を提出した、山本首相は極力留任を勸告したがどうしても聞かない、處で其の後任者を選擇して楠瀬中將を得たのである

◉楠瀬中將といへば、朝鮮王妃殺害事件で浪人を指揮して恐ろしい芝居をやつた人、理屈はわからぬが、猛氣天を衝くといふ、天成の軍人である、王妃事件で縛られて日本に護送せられ、廣島の獄にゐた時は、餘りに其の無鐵砲なる被告振に獄吏をして舌を捲かせた者である

◉三浦公使は、獄中に結伽跌座、赤煉瓦と睨みこをして、達摩さんを學んでゐる安達謙藏は中庸を讀んでゐる、柴四郎は西洋小説を讀んでゐる、楠瀬は芝居にでも行つたやうな氣で洪笑し放吟し、監獄だか別莊だかわからぬやうな風であつたといふ

◉故山地將軍を非常に尊敬した人丈けに豪猛豹を搏ち虎と角する快男兒である、一たび怒つて叱咤すれば鬚髯逆まに立ち、青袍寶劍、妖鬼を逃遁せしむる鐘鬼大

神の概がある、樺太守備隊司令官をしてゐる時に、樺太廳長官熊谷喜一郎と喧嘩して其の職を止めさせられたのは有名な話である

◉楠瀬の如きが長州に生れたら、もう遠の昔に大將には漕ぎ付けているだらう、彼は佛蘭西で修行した若手士官で、乃木や川上が洋行する時に、常に其の隨行員として加つたの彼は亦陸軍部内の俊才であつたことが察せられる

◉たゞ彼は鼻息あらく、自分が氣に喫はぬことがあると猛烈な喧嘩をやる、其處でいつも人に斷られて、榮達の道で躓くのだ、熊谷と喧嘩して免職になつてからは、由良要塞に謫貶せられ、配所の月を眺めてゐたが、天運循環今度陸相の印綬を帶びたのは、お芽出たい事である

◉楠瀬の稜々たる蠻骨には、山縣初め長閥の軍人は大に避易してゐるのである、これなら長谷川と大刀討ちは大丈夫と、權兵衛首相が白羽の矢を立てたものか、楠瀬たるもの、一生一代の晴の場所、木越がやり損ねた、陸軍整理の斷行を其の免職を覺悟して、大膽にやつて貰いたい

山本忠秀

◉人あり山本忠秀を評して曰はく、彼は政界に於て稀に看るの君子人也、然れ共竟に政治家の器に非らざる也と、料るに斯言亦一理無しとせず、然れ共是れ到底皮相の觀察にして、未だ山本を知悉せるの評といふべからざるが如し

◉若し夫れ政治家とは、詐言詐術を事とし世を害ひ人を害ふの巧妙なるを以て本領となさば、我が山本の如きは、政治家のセの字も附せらる可き資格なかる可しされど吾人が普通に解釋せる政治家とは、斯かる惡義のものにあらずして、吾人は寧ろ斯かる惡義の政治家が世に跳踉跋扈するの煩に堪ゑざるに於て、論者の山本觀や、所謂狂人走つて非狂人走るの類ならざるかを思はずんばあらず

◉有態に白狀すれば、余輩が政友會高知支部に信頼するは、其の主義綱領は兎も角、信頼するに足る可き人物の多數あれば也、換言すれば政治家らしき、政治家の多ければ也、余輩は敢て大正倶樂部に余輩の理想的政治家絶無なりとはいはず

然れ共温厚佐野傳の如き、將た岡林起盛の如き、乃至前田靜東。森榮の如き、着實眞面目なる畠中卓爾の如き、光森德治の如き、單に公職の肩書を有する者のみに就て觀るも、之を大正派中に索めて果して幾人かある、況んや我が山本の如き余輩は認めて以て片岡健吉以來の最も信賴す可き、政治家らしき政治家となすに躊躇せざる也、勿論其の手腕閲歴識見等の上よりいへば、或は異論者もある可し唯だ其の純潔無垢の人格と、着實眞面目なる彼が性格とに至つては、縣下又た何人も異存なからむ

◉試みに現時の政友會高知支部より我が山本を取り去りたりとせむか、吾人は如何に其の殺風景を感ずるならむ、町田あり、檜垣あり、其の他知名の士に乏しとせず、されど此等は皆一方の謀將智將として一種武骨めきたる凄味を有す、獨り人間の綿ともいふべき山本あり、黨員相互の間の圓滑を圖るが故に、政友會高知支部は屢ば破裂せんとして而かも破裂せず、擾々として咬み合ひ乍らも始終泣き寢入りに納まりつゝある也、若し地を換へて之が大正倶樂部なりしと仮定せよ、

黨員は疾くの昔に二個にも三個にも分裂し居たらむ也、重ねていふ、政友會高知支部の破裂せんとして破裂せざるは、山本が人格の賜也、仝時に其の眞面に土佐を憂へ、黨を憂ふる眞面目なる性格の力也、君子は無爲にして化す、誰か山本を政治家の器に非らずといふ

槍澤直幸

◉安藝郡の地由來杓子定規を外れたる人物に富む、我が槍澤直幸も亦た御多分に漏れぬ一人なり

◉縣立師範と中學とに教鞭を執りつゝありし彼は、何と感ずつてか忽ち其職を辭して上京し、東京英語學校に入りて英語の練習を始めたり

◉教師志賀重昂一日彼の面を注視つゝ曰く、諸君の中には僕より年の長ぜる者あり、と、暗に彼を冷罵せるなり、彼れ破顔微笑して何等答ふる所あらず、眼中固より重昂なし

◉越て一年彼は試驗に落第して校を退き日本新聞社に入れり、帝國議會初めて開かれ、各社爭ふて傍聽錄を揭ぐ、中に就て日本新聞最も異彩あり、行文時に莊重に時に絢爛に、天馬空を驅り香象海を絕るの概あり、而も燃犀の眼光着々時事の急所を指摘して過らず、各社記者を簡拔し其の萬一を髣髴せんとするも能はず、日本新聞の議會傍聽錄は實に天下一品の稱を擅まゝにせり、而も是れ我が槍澤の筆なりしなり

◉彼れ夙に圓覺寺の洪嶽に參禪し、直指人心、大に妙諦を捉ふる所あり、洪嶽は今の宗演の師なり

◉彼れ貌寢に而も邊幅を飾らず、衣袴其の破るゝに任す、途上往々人の指笑する所となれども毫も顧みざるなり

◉彼の奇行の最も甚だしきは、其の敎員時代に在り、彼は日々菓子を袖にして登校し、敎場に在てムシャ〳〵と之を食ひしと云ふ

◉福富孝季は世之を稱して國士の典型と爲す、我が槍澤は實に福富に知られて久しく其の塾を監せり、英雄よく英雄を知るとせば、福富によりて槍澤の人物を推すべし、而も回也不幸短命にして死せしなり

◉直幸の弟に恒猪と云ふ者あり、業を高等師範に卒へて今某中學に校長たり、才學共に優、未だ知らず人物の安藝式なるや否を

山口兼良

◉若し人間の眞價が、棺を蓋ふて後に定まるとせば、其の齡未だ不惑にだも屆かぬ山口兼良の如きを、捉ゑ來つて兎や角いふは、恐らく大早計たるを免れまい、然れ共彼が歸往の行動に溯り、所謂古きを温ねて新しきを知るの筆法よりせば、彼を知る者、何人か能く彼の爲めに長嘆大息を發せざるを得る者ぞ

◉往年、彼が高知を逃れて、幡多に走るや、時人は目するに足利尊氏の西海落ちに比し、異日、必ずや捲土重來す可きをいふた、爾來幾閱年、一度總選擧なる風雲の動くや、果せるかな彼は忽ち頭を地上に擡げ來りて一爪北の機會に掛けて見

やうとした、無論最初から無望の軍を故意に起したので軍は見事敗れたが、併し彼は此の一擧の爲めに從來捨つてゐた自已の名聲を幾分か拾ひ上げ、山口兼良は漸く社會に復活せうとした

●彼れ何ぞ圖らん、其の後半月にも滿たぬ内に、彼は夜陰に乘じて女學校に忍び入るが如き狂態を演じたとの噂を立てられ、折柄拾ひ得たるの名を、再び奈落の底迄投り込むて畢はうとは、彼は實に是れが爲め二度と死むだのである、あゝ廿四才にして高等文官試驗、判檢事辯護士等の試驗に及第した當年の秀才山口兼良タツタ九十票でも衆議院議員の候補者であつた山口兼良、其の山口兼良が是の樣にして社會から再死を敢て遂げるとは、吾輩實に彼の爲めに殘念に堪へられない

◉彼にして及第當時より官職にありつかしめて置いたなら、彼は夙つから地方の事務官位になつてゐるだらうに、今りの放縱、餘りの自墮落は到々二回迄、已れを殺すの運命を捲き起して了つた、返すゞも殘念な男だ

◉去り年ら、何と謂つても彼はまだ若い、今後よく此の苦い經驗に懲りて、酒と女とに注意したなら三度復活するの時が來ないとも限るまい、吾輩は才人兼良の爲めに、所謂三度復活を願ふてやまぬものである（明治四十五年稿）

安岡雄吉

◉千里の駿足も、伯樂に遇はざれば空しく槽櫪の間に斃死さるを免れず、我が安岡雄吉の如き、亦た利器を懷抱して鬱々塵途に老ひんとするもの、誰か一掬同情の涙なからんや、伯後藤象二郎の大同團結を唱へて天下に遊說するや、其の颯爽たる英姿と博洽なる雄辯とは、六十余州の山川草木を風靡し、時の政府をして一大恐慌を惹起するに至らしめたりき、而して伯の幕僚として、策畫せしは、實に我が安岡の徒なりしなり

◉安岡が再後の花を咲かせしは、其の縣より選出されて、代議士となりし時に在り、而かも彼は代議士としてよく活動したるにはあらず、彼の長所は別に在り、彼は學者なり、其の政治上の智識に至つては滔々たる世の政客は素より、專門攻

究の人々と雖も、彼に對しては或は一籌を輸せせざるを得ざるものあり、櫻に梅の香を持たせて、而して海堂の姿あらしめば、理想之れに過ぐるはなからんも、然く注文通りに行かざる如く彼は學者たる丈け非實際家なり、活動家の顧問となり、參謀となるは適任なるも、彼れ自身には活動する能はざるなり

●彼は未だ大に獨特の材幹を發揮せず、然らば今後之を發揮するの時期あるべきかと云ふに、酒精に中毒して昏々たる彼は、仮令時期最早用に堪へざるべし、此の如にして一代の學者は、槽櫪ならぬ書冊の間に醉生夢死の生涯を了らんとす、惜まざるべけんや　（明治四十四年）

町田旦龍

●久しく行き惱むで居た政友會高知支部の役員問題は、今度の総會で愈よ決定した、即ち支部長は町田旦龍君で、專務幹事は佐野傳君、檜垣、山本、細川、水野なんどいふ人々は悉く顧問役にして而も其の顧問役は老壯者を通じて十餘名も置

いてある、是なら差當祭り込むだとか、込まれたとかといふが如き問題は起るまいから從前の樣な種々の喧嘩も出來まいと思ふ、若し夫れ町田君の支部長は如何しても適材を適所に据ゑたものといはねばならぬ

●支部長は支部の總支配役であるから餘りの八釜し屋は禁物だ、勿論自已の意見をも徹底ささなければならぬが、多くの場合に於て努めて衆議に聽き且つ夫れを容れる可く辛抱が肝腎である、貫目に於ても閲歴に於ても檜垣君なんどは耻しからぬ人だが、併し如何も檜垣君は自己の意見が多過ぎる、而かも君は自己の意見が行はれないと非常に不平がる流で、政論家といふを誤まれりとすれば、專制政治家と評するが適當で、支部長などには適當し難い

●町田君も大に意見のある人だ、時々鳥渡した事柄にも大した意見を持ち出して社會を騷がせ問題を太める僻もあるが併し檜垣君に比すれば幾分遠慮深くさ程露骨でない、のみならず君は或る程度迄他に讓つて高覩の見物を利め込む丈けの巧者をやる点があつて多勢の人を纏める上には檜垣君より幾らか便利である、要す

るに檜垣君は鉄砲玉の如く一度砲口を出た以上は眞っ直に飛ばねば承知の出來ぬ人、町田君は具さに迂餘曲折を極めて行く方、二人共頭腦の明晰にして智謀策略の巧みなことは支部中比肩する者がないけれ共、イザ支部長といふ問題になると町田君が檜垣君よりも稍や便利である

◉且つ夫れ町田君は財力の点に於ても豐富である、政友會支部長の篏り役は差し向き此の人の右になからう

松村寛藏

◉土佐の財界に於ける松村寛藏の名は、隨分久しく且つ素晴らしいものだが、近來君の名は又た政界でも喧傳さるゝに至つた、即ち君の勢力は今や財界より政界に延び來つたのである、知らず、君は將來政界に立つて何を爲さんとする乎

◉君は議政壇上に立ち、議論を上下する態の人ではない、然れ共君は多少親分肌の所がある、自ら采配を取つて、衆に向ひ號令するに足る丈けの資質を貫目とを

有する、而して此の資質は君の有ゆる巨万の富、及び君の勢力範圍に於ける殆んど無盡藏ともいふ可き財力のお蔭で着々事實の上に發揮されつゝある、此の如き人は政界の表面に立つよりも裏面に廻つて企畫策謀を講ずる方が便利で而かも過ちがないものだ、君は自已を知るの明に基いてか、未だ曾て表面に立たぬ

◉今の大正倶樂部は、舊國民派の一部と、舊自由派の一部と、而して今の實業派との鼎立して成り立つたもので、松村君は實業派側の事實上の首領である、君にして若し代議士たらんとせば、僅に是れ一擧手一投足の勞に過ぎぬ、而かも君は代議士は勿論、縣會議員にもならうとしない、君は東京に於ける森久保作藏、大阪に於ける中橋德五郎、神戸に於ける松方幸次郎の如きものだ

○自ら表面に立つを避け、裏面に陰然たる勢力を扶殖しつゝある君は、やがて代議士以上の人物として、今の大正派を自由自在に操縦する大立物となるであらう斯くて君は其の大勢力を利用して實業方面に多々益々驥足を延ばすことであらう何は兎もあれ、君の將來は非常の注目に値するならむと信ずる

松岡虎八

◉松岡虎八は、一青樓の主人のみ、而も其の事、自由黨史と併せ傳ふべし

◉當年縣下の少壯年が、自由民權の說を唱道するや、主義の爲には生命財產を拋出したる彼等も、流石に有情の動物也、萬斛の杯酒、時に磊塊の心胸に澆がざるを得ず、是に於て足を巴塘狹斜の地に運ぶ者益す多く、而して陽暉樓の如きは、宛として彼等の梁山伯たる觀ありし也

◉よしや海南苦熱の地でも、粹な自由の風が吹く、是れこの一俚謠、以て彼等志士の面影を髣髴するに足らずや、蓋し民權論に對する、政府の迫害干涉は、流金爍石の三伏の苦熱也、而かも海南半壁の天、よく同志をして死生相許し、然諾相重んじ、大義皷吹の本山たる實を全くせしめたる、即ち粹な自由の風が吹くものも也、されど斯かる粹な俚謠の唱出さるる半面は、彼等志士が如何に多くの勢力を花柳界に有せしかを語るものあり

○此の時に當り、我が虎八が、よく小ルーソーや、小ユーゴーを歡待し、巨万の酒食を折簡して吝まざりしは義か、狹か、抑も利を永遠に期せしかは知らず、孰れにしても其の胸襟と鑑識との、平々凡々たらざるを見るべし、重ねていふ、土佐の自由黨士の一半は、陽暉樓史なり、主人虎八の名は、黨史と共に、之を千古に傳へざる可からずと　（明治四十三年）

松尾富功祿

◉政友會高知支部の大立物佛天居士松尾富功祿彼れは文久三年に香美の郡は山田の町の眞中へ生れ落ちた若い頃は郵便局をもやつてゐたが此の頃からして例の佛天主義を充分に發揮し松尾は存外生で喰へぬとの評判があつた、爾來今日に至る迄の彼の經歷逸話並に現在の山田町長、土佐生糸共同揚返聯合會長、縣會議員、縣參事會員、其の他土佐新聞の主幹抔としての彼れに就て之れを論評せんとすれば隨分書く可きことも多いがそれ等は暫くお預けとして彼れは目下の所肩からヤケ

ル程の多くの公職に關係してゐるので一年三百六十五日の間晝であらうが夜であらうが其の他日曜大祭日正月等の區別なく、何時も活動の打ち續けで恰も豪猪の猛然として野を驅けるが如く奮鬪突貫しつゝあるの一事は亥の歳の新年早々兎に角見逃す可からざる點であらう、彼れは大平無事の時には過半町役場に居るけれど彼れの頭の中は政友會、新聞社、揚返事務所、生絲界、縣政、其の他町の事、一家の事等に迄も間斷なく注意を八方に飛ばせ一々心の中で此等の事柄を整理して行く、去れば何か事の起つた時は今朝役場に居たと想つても夕には早や縣廳へ來てゐる縣廳に居たかと思へば土佐新聞に居る更に山田へ返つたかと思へば忽ち本町の政友會支部へ現はれ揚返へ來てゐると云ふやうな具合に轉々出沒殆んど席の暖る暇がない而して此の多忙繁激なる數年間は遂に習ひ性となつて自宅に居る時でも決して拱手して遊むでゐると云ふことはない訪問客の無い間は掃除をしてゐるか細君を助けて着物の縫糸をほつしてゐるか乾度何か遣つてゐるのである、しかも彼れの佛天式計畫は此の樣にザワ〳〵してゐる間に悉く熟して毫も誤あることがないから素晴らしいものだ、聞けば來年は中央の政界へ迄突進せんとの野心を持つてゐるらしい巧く押し出して行つた日に日比谷原頭で佛天を振り廻はす時こそ彼の眞價は充分に解るだらう

牧野富太郎

◉佐川の地たる、夙に文士學者の淵叢を以て著はる、獨り鰻の名物を以て聞ゆるに止まらざるなり、意ふに深尾家累世薫陶の然らしむ所ならんか、抑も山水靈淑の氣の、盤旋して自ら其の特殊の氣風を成せしに非らざらんや

◉我が牧野富太郎は佐川の產なり、而して最も學者的氣質を有する人なり、彼の植物學に於ける透詣や頗る深く、古今東西の學者が未だ發見せざる所を發見し所謂マキノと稱する植物を有するに到る、彼は實に世界の學者なり、唯だ日本の學者のみならざるなり、聞く彼れ素と素封家なり、しかも其の學を好んで四方流寓するや、遂に家を擧げ、財を擧げ、妻女を擧げ、一切他に委托し顧みざりきと、

斯くて世人が共の狂態を嗤笑しつゝある間に、彼は學者として鬱然別に家を成せるなり

◉彼れ未だ博士ならず、然れども稱號の有無は學の深淺を測るの繩尺に非ず、彼の如きは實力の博士なり、博士以上の博士なり

福留鐵藏

◉土佐の辯護士界は福留鐵藏君を得て確かに異彩を放つに至つた。正五位の辯護士銀髮銀髯の辯護士、熱誠にして眞面目なる辯護士此等の點より異彩ではあるが、政黨無關係を高く標榜して起つた處が如何にも特色であるかの如く吾輩の眼に映ずる

◉福留君は其の少壯時代に於て、隨分と政黨の事に盡瘁したものだ、自由民權論の爲めに東奔西走し、世は立憲政治となつてからも彼の有名なる選擧干渉當時には劍戟の中を潛つた仲間である、其後司直の官となつて十數年、全く政治上の事と

沒交渉であつたけれども、今や新に辯護士として何等の羈絆がなくなつた以上、雀は百まで踊りを忘れず、依然、政黨社會に首を突込み昔し取つた杵柄を振廻しさうなものであるに、而も嚴然超然主義を宣言するとは實に意想外である

◉清瘦鶴の如き君は、謠曲と靜坐法で鍛へた躰軀を崩さず、多年法庭で練つた辯舌で大に政爭の弊を論ずらく、土佐は實に政爭の爲めに疲弊して居る、今日の急務は大局に着眼して區々たる蝸牛角上の紛爭を避くるに在る、僕の如きも當初より縣に居たならば矢張黨爭の渦中に捲込まれて居るかも知れぬが、幸に縣外に在り而も全く別天地の人となつて居たから、よく弊害を觀破することも出來れば、之に感染せぬことも出來る、僕は敢て煩累を避けんが爲めに斯くするのでない、又た敢て敵を造るが嫌で斯くするのでもない、僕は大に公共の事に努める積りである、殊に實業の振興社會の改良等に就ては其の心力を傾倒するを辭せぬ、但し政爭は眞平御免であると

◉縣下の如き政爭の激しき地方大抵の人が何れかの政黨に關係を有する地方に於

ては辯護士の營業主義から割出して政黨無關係が果して利益であるか否は疑問である、然り疑問ではあるが福留君に取ては介意する所であるまいと思ふ、故山にはタン田もある、永年の給料の貯蓄もある、其の主張通りマア大に遣ツて見るさ

藤澤富士馬

◉小高阪と云ふ所は、要するに月給生活の在所である、從つて生つ粹の大地主とか大資産家などゝいふ者に乏しいが一人其の中に一風變つた長者がある、それは藤澤富士馬君だ

◉君は其の居西谷部落にあつて資産數万、四邊の社會自ら別天地をなし、種々厭ふ可きの多きに大に頭腦を惱まして自已の資産の豐富なるに委せ、兒童に物品を貸興して就學を奬勵し、戸々を勸説して風俗の改良を圖つたりして切りに部落の指導誘掖に努むる一方村會義員として、村治の事にも斜旋の功尠なからざるものがある

◉特殊部落の改善は容易の問題でない、要するに彼等は如何にしても普通民と對等の地位に躍り出づることは出來ぬと云ふ樣な、誤まれる絶對的の厭世觀を懷いて萬事に消極主義を取り、やけのやんばちを以て進むから普通民は矢つ張り特殊民を特殊だと呼ぶのである、呼ぶ者の罪か呼ばしむる者の罪か、此所等は彼等社會の十二分に靜思せねばならぬ所であらう

◉此の點から云へば、藤澤君などは余つ程豪い所がある、君は何所へ行つても平氣なもので一向遠慮のあつたものではない、君は慥かに信ずる所見る所があるに違いない特殊部落の改善は外から之を鞭達すると同時に、内から奮つて呉れる者がなくては其の効果は擧らぬ、富士馬等の如き有力家は余程責任が重い方である折角自愛する所あつて、多々部落の爲めに努力して貰ひ度いものである

小松與右衛門

◉赤陵の地に一老俠あり、姓は小松、名は與右衛門、人となり眞摯にして熱誠其

の識見亦た頗かに俗流を拔くものあり、宜なる哉鄉黨仰で以て嚮往する所を定むるや

◉彼は今日所謂る政黨なるものを見限りて、後は一指を其の競爭に染めすと雖も曾て自由黨の爲めに活動して、香郡の重鎭と稱せられし事あり、明治二十五年選擧干涉の行はれて、殺氣滿々土佐の天地を掩ふや、郡の有志相會して、之れに處するの策を講ず、議して經費に至り、容易に決せず、與右衛門後れて至る、聲を勵まして曰く、黨の爲めには我輩現に生命を提供しあるに非ずや、區々の財產何かあらん、宜しく擧つて之を投ずべきのみと、衆赫然として語議乃ち定まる

◉彼れ、家世々酒造を以て業とす、然れども家業の外、苟も遺利を以て興すべきある、必ず卒先して其の範を示さざるなし、赤陵の西長堤の蛇蜒として應に畫きんとする所、豊沃なる一帶の小松新田は、彼が着手せし耕地整理の功の成れるなり、彼れの創業せし煉瓦製造は、時運の未だ許さゞる爲めに之と中廢せしと雖も立派な煉瓦が多々益々辯じらるべき保證は、彼の試驗によりて始めて得られしことを忘るべからざるなり

◉十室の邑、必ず丘の如きものあらん、剛健にして質實、一意公共の事に盡瘁する我が小松與右衛門の如き人物が、各地方に散在することを得ば洵に以て鄉黨の幸福國家の慶事なるべし（明治四十四年）

小西鹿吾

◉昔の町人は今の實業家なり、金是權の世の中、彼等は時を得顏に公共の舞臺に蠢動すれども、而もよく町人根性より脫却し得たる者果して幾ばくかある

◉我が小西鹿吾も亦藥屋なり、町人にして公人たりし人なり、但だ彼が滔々たる流俗中に一頭地を拔けること、猶ほ攝津守行長が當時の豪傑間に一異彩を放ちしがごとし

◉彼れ市會議員として貢獻甚だ多し、而して高知實業新聞の經營は其の最も手腕を發揮せるものなり

彼れ算數に精しく、商機に敏に、事を處する綿密周到敢て或は遺漏あることなし
彼れは雄辯家に非ず、然れども、其の滿面に微笑を湛へ虎の子の如く首を振りつゝ娓々として談ずるに當りてや、條理暢達而も誠實之を一貫し聽く者敬服せざるなし

◉彼は眞直に坦々たる道を歩みし人なり、故に彼には逸話なるものなし、唯だ一二逸話ならざる逸話の傳はるのみ

◉土佐電鐵の起業されんとするや、彼の同志は從前の感情より之に反對する者少なからず、彼獨り曰く、電鐵は近き將來に於て斷じて有利なるを期すべからず、而も交通に便することは至大なり、僕には斯る事業に投資すべき餘力なきも、餘力ある人ありて計畫し呉るゝは寧ろ望外の幸ならずやと

◉彼れ胃瘤を病み死期既に定まる、而も細は一家の事より大は公共の事に至るまで從容之を處理する平日の如し、偶ま電話設置の議あり、彼れ市參事會に出で熱心に會員の宅亦た之を架設すべきを唱ふ、蓋し別に寄附金を要するなくして而も

他日必ず有利なるを以てなり、人皆彼が自家の命の旦夕に迫れるを忘れて一意公益を思ふを多とす

◉上街組合に貯蓄金若干あり以て林式を買ひ置けり、小西死する前二日、景氣面白からざるの故に之を賣却するの議起り、之を彼に諮る、彼れ曰く、不可なり、時利あらず少しく待たば景氣心ず回復せん、此時に於て賣却するも遲しとせずと果して其の言の如かりき

◉商魂商才の徒は箒で掃くほど多きも、士魂商才の者は寥々たること晨星啻ならずして、獨り小西在り、彼も今や乃ち亡し

小男十五人

若し夫れ、總身に知惠の廻りかぬる大男と、居常腦味噌の各方面に亘つて活動し一寸のすきのない小男と孰れが可なるやを問はば、何人も小男の方へ手を擧げるに躊躇しまい、よし餘り見榮はせずとも、雨の尻打ちが頭に屆かうが、犬の糞の

臭氣と直接の交渉を持つにしても、羽柴の秀吉は遂に太閤の地位に進むだ、身体の小い土州山が東京でも地方でも、常陸、太刀等よりも、遙かに花の収入が多いといふのは、其の身体に比して土俵に於ける腦味噌克く四十八方に動く結果ではあるまいか、思ふてこゝに至らば大男敢て羨むに足らず、小男決して悲むに足らぬ、細うても針の呑めぬは昔も今も同しである

◉土佐には國見山の如うな大男もある、清水源井、谷脇靜一、中内源馬、入交源十郎、富田幸次郎、氏等も隨分大男の組みであるが、一面に於て小男先生も隨分乏しうない、即ち實業社會に上田保氏あり五尺に足らざる殆んど八分、お醫者仲間に中村源美氏あり、五尺に足るか足らざる大の疑問、死んだ谷内晩翠は四尺八寸二分目方に於て八貫六百九十四匁しかなかつた、縣會議員の植田義朝氏も五尺の人より一寸程低い、それから今の縣廳へ行くと杉山知事にしろ、和田事務官にしろ、植木飯尾の兩事務官にしろ、五尺以上果して何如程の發達を示してゐるかは疑問である

◉郡長で小いのが江淵氏、是亦五尺から少しく切れる、赤の阪楠氏は四尺九寸三分、寺山郵便局長が五尺一分、細木、弘瀬の兩中尉は共に漸く五尺に屆いた許りお醫者の黑岩壽内氏は驚く勿れ四尺七寸四分、まだ此の外にも小い人物は多いが余り長くなるから此の邊りで御免を蒙ることゝして扨て以上の人物が富田、谷脇清水、入交、中内なんどゝいふ大男に劣る　否や、極めて趣味ある問題だらうと思ふ

◉吾輩は敢て斷定をしない、人と人との比較論評は遠慮して置く、併し乍ら前に掲げた人等は是れ孰れも縣下に於て相當の地位を占めてゐる人等であると云ふことは説明する迄もない果して然らば、小男と雖何も悲觀するには及ぶまい、曾て何かの會合の席で此の間火傷た和田事務官が自己の小男を非常に嘆いてゐたか、あんなことは無用の心配といふもの天下小男の士宜敷意を強ふして可なりである

寺山安高

◉此の頃小供を役所へ使に遣るのに、一番怖がらずして、鳥渡店屋へ買ひ物にでも行くといふ樣な調子に、平氣で行つて呉れる所は高知郵便局に限るのである、郵便局へ行つたら、美しい姐さんが居て、親切に敎へて呉る、それから局の中で手紙を撰り分けたり、金錢を取扱つたりする事や、其外何も彼も見へて面白いとは、彼等の友達に話してゐる所である

◉小供は存外嘘をいはぬものである、警察の門を潜る時の氣前と郵便局へ這入つて行く心持とには何人も實に非常な相違がある、これは共に其の役所柄そうなくてはならぬ筈だ、然れども斯く如才ない高知郵便局も決して最初からあんな所では無かつた、前の萩野局長が居た頃は、何だか一種役所臭い嫌があつて、寄り付けない樣な氣がしたのであつた、我輩は茲に至つて現局長寺山安高氏を有り難う思はざるを得ないのである

◉氏は實に立憲國に於ける、官吏の名を耻かしめざる好人物である、其の極めて温和な點に於て、其の何人に向つても親切を傾倒して、其何所迄も職務に熱心な

る點に於て氏の如きは比類極めて稀である、氏の遺憾なき平民式の發揮振りや、圓滿なる紳士的の態度等は、彼の杉山四五郎知事を以てするも時に、尙及ばざる遠き事を見るのである

◉郵便局は、文明のトンネルである、人事百般の意志は、すべて此のトンネルのあるが爲めに敢て遠廻りをするの不便なく、極めて敏活に且つ有効に通ひ得るのである、で其當路者は飽く迄も親切、忠實、便利等を旨として、苟も通過物の障碍となるべきものは極力これを除く可く努めざる可からざるのみならず、更に出來得る丈け、多くの物を通過せしむる事に努力せねばならぬ、郵便局の役人は實にトンネル守であるのだ、とは是れ氏の郵便局觀である、流石に局長の見識を備へたりといふべしだ

◉寺山氏は克く職分を解して居る人だ、局内を開放したり、優しき女事務員を受付に据はらしめたり、或は新聞紙上で通信事務に係る種々の注意事項を發表したり、或は又電話の需要家を訪問したり、更に特殊部落迄講話に乘込んだりするの

活動振りに至つては、日本郵便局多しと雖も、恐らく氏に及ぶ局長は少からうと思ふ、此の點に於て氏は只トンネルの中を圓滑にするといふ事丈けの役目しか解らない樣な人にあらずして、又可成世間をしてトンネルを充分利用せしめんとする熱心な活動家である

◉氏は郵便局長として隨分久しい經歷を以て居る、明治十四年の十一月に電信學校を出て以來、直江津、函館、日高、青森、遼陽、和歌山、旭川、等の局々若しくば通信所に長として、昨年四月初めて高知局へ赴任するに到つたのである、願くばもう高知で頭を白らうして貰ひたいものだ（明治四十四年）

安藝愛山

◉今次の總選擧に於て、理想選擧を標榜して起ちし、愛山安藝喜代香君は、得票七郡を通じて僅に五百有余に過ぎず、再び、敗戰の慘目に遇ひぬ、而かも之れ安藝君敗れたるに非ずして、實は我が高知縣の有權者夫れ自身が敗れたるのみ

◉其の閲歷よりするも、學識德望の夫れよりするも、彼は夙く代議士たる可き筈の人也、代議士として少なく共今日の政治社會に、重きを爲して居らざる可からざるの人也、唯だ如何せん安藝君の代議士觀たる、之を自動的に買ふ可きものか將た他動的に受く可きものかとの嚴重なる區畫を設け、而して其の信念は前者にあらずして依然後者を取る、之れ彼が優に代議士以上の資格を有するに拘はらず何時の選擧にも敗るゝ以所也、果して然らば、安藝君の敗るゝは安藝君の罪にあらずして、縣民政治思想の不振の罪也、吾人が安藝君の敗戰を目して、安藝君が敗れたるに非ず、高知縣の有權者夫れ自身が敗れたりとなす、洵に之れが爲のみ

◉然れ共安藝君は、當初より決して當選を豫期せしにはあらず、其の斷然候補に起つて、不手廻り千万なる弱卒を引具し、公明正大の運動に殆んど人事の限りを盡したる、その期する所は此の理想選擧に依つて果して幾何の投票を得可きか、そも縣民の政治思想は那邊に迄進歩せるかを知る可く、之れが尺度の犧牲となりしに過ぎず、されば落選となるも彼の胸中には普通の落選者がする、一人子を殺

した程の遺憾の念は絶えて往來するなく、坦懷、寧ろ笑つて悠々古書と親むあらむのみ

◉莫逆、彼は現在の儘にて葬り去らる可き人物にあらず、憲政の祖國たる土佐人は、攻めて一回たり共當年の志士、安藝愛山をして、議政壇上の人たらしめざる可からざる責任を有す、而も此の事何れの時代にか期待す可き、瞑目、思ひを此の事に致せば、感慨多く云ふに忍びす（明治四十五年稿）

安部正十郎

◉赤穗義士の苦節を知る者は、亦た天野屋利兵衛の俠骨を記せざる者なからん、彼が男で御座るの一語は、千秋の下凜々として猶ほ貧夫を廉にし頑夫を起たしむるに足るものあり

◉西郷の兵を薩摩に擧ぐるや、林有造片岡健吉等土佐の健兒を率ゐて相應じ、先づ大阪鎮臺を陷ゐれて之に據るの計畫あり、而も最も困難を感ぜしは兵器彈藥の

欠乏にして、我が安部正十郎が奮然起て天野屋利兵衛の役を勤めしは此時なり、

◉不幸にして事發覺し、乾坤一擲の壯圖も空しく南柯の夢となり了りぬと雖、神田屋主人の稜々たる俠骨は自づから人口に膾炙するに至れり

◉弱を助け强を挫くは實に彼の先天的氣質なり、故に隱居して一竿の風月を侶とするに至つても公共の方面に向つて其熱誠を披瀝するを忘れず、高知實業新聞が土陽新聞の專横に反抗して起るや、彼は入て社務を監せり、土佐慈善協會が出獄人を保護し不良の徒を感化せん爲め、設立さるゝや、彼は副會頭として久しく其事業を斡旋せり、彼の行動は何處迄も義俠的なり

◉時平にして復た天野屋利兵衛を起たしむるものなく、彼の名亦た埋沒して漸く聞ゆるなからんとす、幸か、抑も不幸か

有光光與

◉豐臣秀吉曾て嘆じて曰く、太田三樂の智を以てして一國の主となる能はざる實

に天下の不思議なりと、我が有光光興の事業を以てして少なくとも一村一卿の殿様となり得ざる、是れ亦た天下の不思議ならずんばあらず

彼れ殖林家として著聞せること久し、本多林學博士の赤松亡國論を唱ふるや、彼れ躍起となつて之を論駁す、議論根據あり、鑿々として肯綮に中る、聽く者推服せざるなし

彼の事業は唯だ殖林のみならず、果樹の栽培、荒蕪の開拓、其他苟も遺利の收拾すべきものある、必ず卒先して企畫せざるなし、其の功績者として藍綬章を授けられたる蓋し當然なり

◉獨り怪しむ、彼の鄕黨に於ける聲望が落莫として振はず、其の事業と正に反比例なりしことを、豈に喬木風に嫉まれたるか、抑も彼の德或は欠ぐる所ありたるか

◉彼を識る者は萬口一辭彼の利己主義を云はざるなし、彼が果して利己主義の一点張りなりしや否は疑問なるも、彼が苦情好き爭論好き訴訟好きなりしは事實なるが如し、アカの他人は固より親戚知人鄕黨より官公衙に至るまで、彼は之を相手取て錢厘の利益寸毫の權義を爭ふて止まず、爭ふ、必ず最後まで假借せず、彼の信ずる所に據れば讓步妥協の文字は畢竟自ら欺くと云ふ文字の代名詞に過ぎざりしなり

◉彼の主張や彼の議論や傾聽に値ひするもの少なからざりし、而も彼の冷酷なる而も執抑なる性行は、遂に人をして嫌忌して相接近するを避けしむるに至り、一郡一縣の摸範的人物たるべき彼は、此の如くにして一村にも將た一部落にも蛇蝎視されたるぞ是非もなき

◉遮莫、彼の產業上の功績は優に後昆に傳ふるに足る、八流山の西、赤野川の上彼の經營の手澤は嚴として存す、斯業に志ある者は就て一觀すべし

佐野紙業頭取

◉土佐紙業組合頭取佐野傳、此の六月を以つて期滿ち、改選の役員會は、近く廿

五日を以つて開かれんとす、而かも役員の意嚮、悉く佐野の再選に一致し、選擧會は平々坦々、僅かに形式的に開閉さるゝに止る可しと觀測さる、衆望彼か如きを以てす、恐らくは世評に違はず、彼や再び頭取たるの地位を捷ち得べし

◉蓋し、彼は紙業組合頭取として、洵に恰好の人物なりと云はざる可からず、彼は一面政治に關與し、足を黨界に踏み入るゝと雖其の用意の周到なる、未だ嘗て深入りせず僅かに片足を投じて、後の片足は固く自已の本領より一歩も動かしめず、爲に彼は黨人として不熱心なりとの攻擊を浴び、事實亦、黨事の上に目覺ましき活動の跡を見ざるも、彼は是れあるの故に、普通黨人の如く敵を出さゞるの利益を有するにより遠く政爭の外に逸脱せる實業團体、紙業組合の頭取として彼に若く者、普く索めて遂に得べからず、今や滿期に際して組合役員の彼を再選せんとする何ぞ偶然なりと云はむ

◉惟ふに、彼が斯の如く政治に深入りせざるは、政黨屋の末路のすべて太甚しく悲慘なるを知れば也、彼常に人に語りて曰く『政黨の事儲けて余裕を得たるの後

に始めて云ふべきのみ、余と雖代議士などの肩書きの好ましからざるにあらず、唯だ恐る所は現在の余が代議士となりたる時は則ち余が貧乏になるの時なるかも知るべからざるにあり』と、人多くは彼の八方美人主義を難ず、然れ共彼が暫く斯る主義の導奉者たらむとするは全く如上の關係によれり、彼は儲くるを目的とし、政治的名譽の如きは、そが自然の副産物として將來すべきのみ、とは是れ實に彼の用意なりとす、以つて其の周到なるを知る可し

◉仄かに聞く、彼は夙に鷄林の新領土に囑目する所あり、近く一事業を彼の地に興し、以つて大に儲けむの計畫ありと、吾人其の眞否を知らずと雖、儁器用ふるに足るの彼、吾人は其の大に儲けて、因りて得る所の自然的副産物も大に大ならむことを望む（明治四十四年稿）

澤田牛麿

大阪市役所と土佐人とは飽く迄も妙な縁が切れぬものと見わ今度又しても本縣出

身の澤田午麿君が助役になつた、併し實際近頃大阪で拾ひ物は澤田君であらふ、其の學問、識見、手腕、一寸とあの位の才物はなか〳〵轉つてゐるものではない市會で說明なんかやらせても、キビ〳〵して齒心地よい、いつ大阪を追ひ出されても、乃公位の代物なら何處へ行つても安氣に啖へると、役人根性でピク〳〵せず何處までも男らしく自分の信ずる處に猛進せむとするのだから、賴もしい

◉君は長閥の根城なる山口の高等學校に學んで、それから帝國大學の法科に入り三十二年卒業した

◉研究したのは獨逸法で、川名兼四郎、鵜澤聰明、谷野格、などゝいふ法學の大家皆その同窓の友であるが、卒業の時、川名博士が首席で、澤田君が第二席であるのを見ると、其の常鱗凡介にあらざる事學生の中からわかつてゐた

◉卒業後、東京府に入つて、千家知事を助けて、役人生活の劈頭第一、先づ其の快腕を揮つたのだ、知事の代理をして某女學校の卒業式に行き、其處で見染めて貰ひ受けた卒業生の一人が今の夫人で、淑婉花の如く、昔の角帽連をして、艶美

の涎をながさしてゐた

◉後伊藤公に知られて朝鮮總督府に入り蛟龍昇天の榮達を期せられたが、公逝いて後、ぐずで間拔けの曾根荒助では、其の才を用ゆることが出來なかつたが、總督府をやめて鹿兒島縣の內務部長、其れから遂に大阪市に聘せらるゝに至つたのだ

◉山椒小粒でもヒリゝと辛らいとは、澤田君をいふべき語、侏儒にして英雄の氣膽を有し、貌を以て人を取る、我これを子羽に失すの、孔子樣の語を思はせるは澤田君の面目である、放膽にして壯快、御すべからざる一種の彈力はなか〳〵其の貌の如からず

◉澤田君醉へば則ち『我は薩州鹿兒島で』を踊る、奇警頗る人を驚す、鹿兒島縣の內務部長をしてゐる時、知事と共に何處かに招待され、酒が廻はると着物を脫いで眞つ裸となり、さあ誰れか相撲の相手はないかと、あたり構はず四股を踏み出したので一緒に來た知事は喫驚し、後澤田君を喚んで、君初めて招待された處で

アンナ事をしては困るぢやないかと、大に泣言をいつたといふ、澤田君は斯くの如く、無邪氣で天眞爛熳な人である

坂本志魯雄

◉坂本志魯雄君が昨年政友會高知支部の專務幹事に擧げられた時城東のさる有力家の評に政友會支部の幹事に阪本を擧げたのは大有りぢや、政友會は唯だ團躰の太い丈けで如何にも間が抜けてゐて機敏な所は少しもないが阪本といふ男も唯だ身体の太い丈けで毫も氣が利かない、乃ち政友會を代表す可く彼れは打つて着けた男であると

◉なる程阪本君は唯だの大男のやうに見ゆる、一寸會つて話してみても彼は何等の奇を吐かず平々凡々徒らに羊の如き頤髯を擦り乍ら『へーさうでせうねゝ、ゝ』位の所が關の山で支部の事務を整理する上にもなか〳〵遽てたものではない今日が暮れたら明日がある、明日が暮れたら明後日がある、豈に憂ふるに足らん

やとでもいつたやうな調子で遲々閑々ポツリ〳〵とやつてゐる、一見した彼れは凡人だ、のろ〳〵漢だ決して掛け引き多き政黨の重役にして適任とは云へない

◉彼れはこんな氣の利かぬ男ではあるが併し彼れの歴史は極めて立派である花のやうに派手な所がある、彼れは實に今の薩摩艦長たる上村大佐と共に壯時南洋はフキリツピンに押し渡つて和蘭の領事館を燒き拂ひ以て彼我の國際問題を惹き起し同島を占領せんと企てた風雲兒である

◉若し此の時計劃巧く圖に當つたならば彼れはもうフキリツピンの王樣として華族位になつてゐたかも知れぬ殘念なことには彼れが滯島中早くも米國と和蘭との間に大問題が生じて彼れの計畫今半ばといふ頃同島はコツソリ他へ奪はれて了ひ彼れは寶の山に入り乍ら手を空うして歸朝するの止むを得ざるに至り一轉再轉到々今の政黨屋になつて了つたのである

◉で彼れは今でも小いことには拘はらない、檜垣が八釜敷騷いでも細川や町田等がエレ〳〵謂つても彼れは矢張り南洋の夢に耽つて燕雀何ぞ大鵬の志を知らむや

と構へてゐるのである、彼れの野呂〳〵たる所彼れの氣の利かざる所、是れ彼れの智の足らざる所にあらずして彼れの眼中には區々たる縣會議員の撰擧や僅々一万や二万やの端金で勝負を爭ふ代議士の選擧位の事は映じないのである、政友會が勝たうが國民黨が敗れやうがそんなことは彼れに於て殆んど屁位にも思ふては居ないのである、彼れは決して只だの野呂間ではない只だの氣の利かぬ男ではない、何方かと云へば豪傑式の男だ、大きく例を取ると西郷南洲式だ、强て凡人の名を冠せんとすれば彼れは非凡なる凡人であらう

◉然れ共今日以後の彼れは再び往年の如き壯事を企つるの勇氣はあるまい、否なな企てんとしても恐らくは之れを施すの天地があるまい、若し何處迄も其の志を行なはんとせば夫れ只だ清國か清國へ行つて馬賊の隊長にでもなつたら或は面白いかも知れぬ、阪本君たるもの一つやつてみては如何か

光森德治

國民黨高知支部が出來て、曖昧なりし土佐の政界が政友國民の兩派に明白に區劃さるゝことゝなつてから、高知の辯護士は、光森德治君を除くの外、申し合はせたかの如く袖を聯ねて國民派に馳せ參じ、政友派の辯護士としては、纔かに此の光森君一人となつて了つた、さうして光森君は、同業者が一同國民黨へ行くのを見送つて『小供等が何を知るものぞ』とせゝら笑ひをしてゐる

なる程君の眼から觀た高原君や、大西君や、下元君、吉本君などは小供であらう此等の人々は、年が若い丈け夫れ丈け政界の行きがかりとか系統とかいふことに就ては敢て囚はるゝ所がないと同時に何れ劣らずの理想主義者である、光森君は此等の人々に較ぶると年も老いてゐるし、多少の行きがかりもあるのみならず、君は一種の超俗家で幾分世間てふことを嘲つてみるの癖がある、ヘン、世の中がさう理想通りに行くものか、成る樣に成るのが是れ即ち世間である、と云ふのが君の一種の信念らしい、是に於てか君は七六つかしい理窟を言ふ者が可笑しくてならぬ、從つて君の法庭に於てする辯護は何時も法理から一わたり飛び放れた奇

拔な常識的議論となつて、判官から傍聽人等に至るまで、腹を掴ませる場合が多い、一事は萬事で、政談演說然り、座談に於て特に然り、人によると、光森は野卑猥褻な話をして困る、土台紳士の面汚しである抔と眞面目に憤慨し攻擊する者もあるが、あれはまだ光森君なる者を充分解し得ざる手合で、君から見れば矢張り小供の方である、なる程君は公開の席上なんどで思ひ切つた卑猥な談話を試みるが例である、けれ共何ぞ知らむ、君の敢て試みる所の野卑猥褻な話の中には慥かに一個の眞理が含まれてゐて、よく其の說話を味はつてみると、慥かに世を諷刺した點がある、君は決してたゞの滑稽屋ではない、明らかに通俗的社會敎育家と謂つて差閊へがない、何人の耳にも容り易き社會的活敎訓は君でなければ到底成し得ざる所だ、吾輩は此の意味に於て寧ろ君を尊敬する一人である

聞けは今度の總選擧に、彼は市からの候補者に打つて出るとの話だ、政友會の支部でも、最早山本幸彥翁を引つ張り出す譯にも行くまい、と謂つて町田旦龍氏も仙石貢氏と太刀合せをする樣な危險な戰爭は敢てするの人でない、今度の市部の

候補者としては、殊に仙石博士に敵對して名乘り出づる程の者は、仙石氏以上の人物か、否らずむば百貫の太鼓を打たねば鳴らぬ、勝つたら勝利よ、負けたら元の嬶だ位に超越して蒐る樣な人物でなければ駄目だ、此の點から論ずると、光森君は蓋し後者に屬する好適の候補者かも知れぬ、況むや君も五六万以上の資產を有してゐる、若し仙石氏が金力に訴へる樣なことありとせば、君なら万と二万との金は投げ出されそではないか、愛嬌家だけあつて市氏に存外同情者が多い、縣會議員の選擧の時にも最高點で……市に於ける…當撰した花形だもの、或は今度も當撰するかも知れないよ

土佐の政治家が片岡健吉氏の歿後政友會に復黨する際、富田幸次郎氏等の一派に向つて『歸り惡くけりや頭冠りをして歸らうぢやないか(政友會へ復歸の意)』と捌けた、そして一種超越した意見を出して熱心に復黨を勸誘した者は光森君であつた、如何か今度の撰擧には山本翁に成り代はつて仙石氏に勝ち、君が當初の勸誘に背いて今は天罰覿面、國民黨なる小數黨の仲に伍して如何することもなら

す、徒らに大言壯語維れ事とし、自ら鬱憤を遣つてゐる富田氏等の前を張つて見るのも、面白からう、若し夫れ帝國の議政壇上徐ろに、疎髯を扱いて近所の八公次郎兵衛の例話に三百の撰良をドッと云はせるの藝當を演するのも更らに〳〵痛快事ではあるまいか

水野と吉本

◉稱して辯護士といふ、名に於てすでに一種の興味あり、名は實の賓ならずといふも、高知の辯護士に、否な天下の辯護士に、餘り甘つたるき人物は居らざる也、天下の大勢は姑く措く、例を先づ眼前の高知に於て看よ宮地榊は如何、城晋は如何、擔見連は如何、小倉知直は如何、志賀凱幾は如何、大西止幹は如何、高原伊三郎は如何、最後に下元馬吉は如何、掲げ來れば何れ劣らぬ辣腕凄敏の徒にして圭角重疊たる野武士の集團たるかの如き觀を呈するに非らずや、而かも此等の群中、偶ま二個の法則違反者あるは奇也、違反者とは誰ぞや他なし、水野吉太郎

吉本彦次の二人者即ち是れ

◉水野と吉本、是れ疑ひもなく、共に縣の法曹社會に於ける愛嬌家也、吾輩は爾餘の辯護士を一稱して無愛嬌者なりと斷ずる者にあらず、然れ共誰れかまた何人に接するも駘蕩の春風の如く、圓轉滑脱にして平等無差別、博愛懇切にして、温順淡和なる水野吉太郎たり、吉本彦次たり得る者ぞ、吾輩は想ふ、其の辯護士たるを知らずして初めて吉本彦次に接し、初めて水野吉太郎に會する者は、必ずや二人者の職業を判定するに、小兒科醫か、基督敎の牧師かを以てするならむ、而して二人者互に其の趣味を同くし、其の性行を同くし、其の年輩に於て相若き、其の宗敎を同くし、異る所は唯だ黨派と、體軀容貌とのみ、奇なる哉

◉二人者黨派を異にすといふも固是れ平等無差別黨のみ、水野は政友派なるの故に、毫も反對派に對して惡感を懷かざる也、吉本は大正倶樂部に屬すれど、政友派の人を見る、依然として我黨の徒也、然れ共是れ平常の場合に於ける、双者の黨派觀たるに過ぎず、政海一朝激浪漲々に會せば吉本の活動や鼠に向ふ獅の如く

敏捷に、水野の遠謀奇策、嶇を負へる猛虎にも譬へつ可し、變事に於ける吉本は遊説の士にして、水野は帷幕の中に隱れ智謀を廻らずの士也、而かも其の平素の靜なること林の如く、有事の日、迅きこと風の如きに至つては則ち一つ、斯の如くにして彼等のする政治道樂は究竟罪に陷らざる也、毒々しからざる也、苦々しからざる也、果然、是れも亦愛嬌の一つに數へられつゝあるを見ずや

◉吉本は縣會副議長及び商業會議所書記長として、交際場裡に多々益々得意の巧妙なる交際振りを發揮するも、水野は何所かに一種世にスネたる趣きなきにあらず、一個の辯護士として多く華會に飛舞するなし、吉本は從來自已の舞台を土佐に置きしの故に、其の名士佐以外に著はれずと雖、水野に至つては一時天下の浪人たりしこと有り、交遊寧ろ縣外に多く、殊に伊藤公暗殺者たる安重根の辯護人として現に彼と事務所を同ふせる鎌田辯護士と共に旅順の高等法院に於て長時間に亘る雄辯を揮ひたるの一事は、偶ま彼の名聲を普く天下に紹介するの傳線となれる、彼が生涯中恐らく再び會す可からざる花の舞台たりし也、二人者何れも尙ほ未來を有す、吾輩切に此の愛嬌ある兩辯護士の自重を促さずむばあらず

三谷軌秀

◉土佐人は總躰短氣なり、而して我が三谷軌秀も餘り氣の長き方に非ず

◉土佐人は動もすれば直情徑行の癖あり、而して我が三谷軌秀も餘り融通の付き過ぎる方に非ず

◉彼の閲歷を以てし、彼の聲望を以てすれば最早衆議院議員となつても可さゝうなものなるに、其の然らざるは何ぞや

◉昨秋大阪府郡部選出代議士の補欠選擧あるや彼、は起て候補たらんとせり、而も深く彼を識る者は其の成功を危ふみたり、何となれば彼は府會に在て常に市民を代表し其の利益の爲めに郡部を壓迫して居たれば、市民に歡迎さるゝ丈け郡部に敵視さるゝを免がれずして、而も郡部選出の候補者たらんとすればなり

◉果然形勢の惡しきが爲に、彼は之を中止したり中止せざりしならば恐らく失敗

に終りしならん

◉今回日野國明と對立しての選擧競爭にも、彼れ三谷は何處迄も不利の地に立ちたり、不利の地を顧みず惡戰苦鬪する處即ち彼の彼たる所以ならんも、さりとては短氣ならずや、少し直情徑行に過ぎずや

◉直情徑行と云へば、日野とても決して三谷に劣らざる人間なり、唯だ日野は其の短所を利用し、三谷は之を損用したる、結果は勝敗の數歷然として分るゝに至りたるなり

◉三谷が大阪府會議長としての地位、二十餘年の久しき大阪の實業界に斡旋したる功勞は、市民の知悉する所なるべし

◉然れども、問題は市會議員や府會議員の選擧に非ずして衆議院議員の選擧なることを記せざるべからず

◉日野が國民黨と云ふ政黨の推薦によりて起てるに拘らず、三谷には何等政黨の後援なし、後援なきは猶可なり、大阪にて積年の勢力ある政友會を脫したるの故

に却て其の反感を招きたるなり

◉默止つて居ても政友派の感情の面白からぬに、而も演說にまで喋々と政友會攻擊を爲せる三谷派の拙や及ぶべからず

◉犬養、河野、島田なんぞ國民黨の大將株が悉く出馬して極力日野の爲めに應援するに拘はらず、彼れ三谷に至つては僅に地方的辯士の太鼓を叩くに過ぎず、勝敗は夙くより決し居たり

◉故に彼の敗ば其の手段の拙なるに坐す、時機の可ならざるに坐す、彼の聲望が對手たる日野に劣りし爲めに非ざるなり

◉江東子弟　多才俊　捲土重來未　可　知、大阪の實業界に於ける彼の勢力は意想外にスバラシキものあり、彼れは猶ほ未來を有す

◉或は云ふ、彼れ鄕國より起たんとすること久し、今次の一敗愈よ大阪に愛憎をつかすと共に、來るべき總撰擧には土佐より打て出づるならんと

◉果して然るか、長陵人士たるもの簞食壺漿して之を迎へては如何

白石直治

（明治四十三年稿）

◉政友會の公認候補者中に於て、當撰の最も確實なる可く豫想されつゝあるは、白石博士と岡田榮の二名也、而して岡田に對する評論は前に既に之を云へり、乞ふ轉じし白石博士を觀む

◉縣出身の博士中の大先輩たると同時に帝國の博士社會に於ても先輩權を有する彼は、中學時代より土佐の秀才を以つて稱せられ、其の明晰なる頭腦、徹透曇りなき知腦は、年と共に益々發達し來りて、其の大學に進むや、教授は舌を捲いて後世恐る可きは白石直治なりと云へりき

◉果然、彼は間もなく博士となり、西歐東米航行幾回、世界新進の知識を汲み、實際に視、飯來我が實業社會、將た學界に、貢献せし所多大、從つて其の地位は、學界に、實業界に駸々として重きを加へ、天下また白石博士の名を知らざるな

きに至る、政友會支部が今次の撰擧に大人物主義を取つて、我が白石を拉し來れる、洵に其の人を得たりと云ふべき也

◉人或は曰ふ、白石や、仙石と共に三菱系統の人、其の共に猪苗代水電經營の上に兄弟たるを觀れば、白石が當撰後に於ける態度や知る可きのみ、政友派の諸公未だ以つて大平樂を夢む可からずと、然れ共是れ實は取るに足らざる反對側の中傷のみ、彼の當撰極みて確實なる可き形勢に狼狽して故ら政友會と彼との間に水を差さんとする者の奸言のみ

◉聞け彼は三日の夜の歡迎會席上に陳べて曰はずや、余は從來政黨には無關係なりしも、親戚故舊の悉く自由黨員たりしより察すれば余が自由黨の化身たる政友會に入會せしことは毫も怪むを須ひざる可し既に縣内有志の推薦により代議士の候補に立ちし以上は飽く迄も初一念の貫徹を期す、と彼れ既に斯の決意あり、謂者今にして恥死するの感なきを得るか

◉學者より政治家に生れ代はり、實業界より政黨界に入りし、今の白石博士は

躬らの所謂白紙の境にある者、其の馬を畫く可きか、將た牛を畫く可きか今にして之れを知る可からずと雖も、彼の學殖及び經歷は、かの理論偏傾の戸水博士等と同一に見る可からず、政友會は彼の力に據つて得る所多く、彼は政友會の力に據つて驥足を延ばす庶幾くは今後一段數段數十段なるを得むか（明治四十五年稿）

下元馬吉

◉昨年頃から國民黨を脱す可しと頻りに取り沙汰せられゐた、下元馬吉君は、過日商業會議所で、國民黨高知支部の解散を決議した際、會衆に向ひ熱烈にして而かも悲痛な告別演說をして支部解散と同時に愈よ從來の同志と袖を分つことになつた

◉世間では、君が國民黨を脱す可く決心をした動機は、縣參事會員の椅子を支部から與へられなかつたにあると言つてゐるが、是れは恐らく想像に過ぎた事柄で下元君を强ゆるの太甚しきものあると同時に、又た君を侮辱するの太甚しきもの

である、なる程、君は支部に於ける唯一の不平兒であつた、其の縣會議員の候補者となつた際にも、支部は當時各地の自派候補者に對し、多くの運動費を融通したりしに拘はらず、唯り下元君に向つては繼子扱にして、應援をしなかつた、そして當撰後に於ても、副議長の職も、參事會の椅子も支部は吝むで君に與へることを欲しなかつた、君は此等支部の仕打ちに對し餘り快い氣はしなかつたに相違ない、然れ共、君は苟も是れしきの小不平に立腹して支部から追ん出る樣な、平將門式の男ではない、君の心中には、もつと太きな不平があつた、而して君は此の大なる不平に堪ゆる能はずして、最後の決心を爲すに至つたものである

◉今の政黨宮派は情實緣の結塊である、日本の政黨は其の何れも主義主張に於て大差がない、日本の現狀は決して二大政黨の必要を認める程、政界に相異れる根本的の思想が漲つては居ない、然らば政友會でも、國民黨でも何方でも好いのである、けれ共國民黨高知支部、縣會議員の多數を占め得た國民黨高知支部は國民黨でなければ夜も日も明けぬ樣に思つて、荐りと他派と極端に迄喧嘩をする、喧嘩

尙ほ可なりとするも、漸く其の多數を恃むで、道路問題や、港灣問題やの起る度に所謂橫暴な振舞ひを初める、君は是に至つて、國民黨高知支部の價値なるものに就て、そろ〳〵疑問を喚起すると共に、顧みて其の虎よりも恐る可き黨派である、天下の公黨に非らずして、感情々實の一偏の爲めに支配さるゝ不正の私黨であるとの考へを懷くやうになつた、君が支部脫會の決意をした主なる理由は蓋し是れである

◉斯う書いて見ると君は如何にも理想的の人物で、其の行動は眞に立派で、一點の非議す可き所がない樣であるけれど、下元君とても矢張り人間である、豈に多少の欠點短所なきを得むやで、君は腹藏なくいふと自我の念が强く、自己の主張は飽く迄も之を押し通さんと企つる、大に磊落な點もあるが一面又た圭角もある、そして容易に人に讓ることをしない、從つて多くの場合に於て、君は他と意見が合はず、よく衝突をする、要するに君は他人と共に仕事の出來る融通利きの人物ではない、是を以て支部でも、下元君丈けは大に持て剩してゐた樣な傾があつた、是れ支部が君に對して、優遇を敢てしなかつた所以であらうと讀める

◉何は兎もあれ頭腦が明晰で、演說に力があつて、一擧にして敵の肝腑を刺す樣な論陳を張る所は現在の高知縣會に於ける一偉觀である、是れも一人一黨主義の君でなくては出來ない藝當、君は如何なる場合に於ても此の一人一黨主義で奮戰する方が自己の眞價を發揮する上に於て得策である

島村速雄

◉東鄕、乃木兩大將我が陸海軍を代表して英皇帝の戴冠式に參せんとし、海軍中將島村速雄、第二艦隊司令長官として之と行を同うす世其の人を得たるを稱せざるなし

◉日露の役海軍の公報が、常に莊重雄渾魂麗の三者を具備して一誦感奮興起するを覺へざらしめしこと人の熟知する所、而も是我が嶋村の手に成りしといふ、果して然るか以て其の人物風采を想見すべきなり

◉其は兎も角、聯合艦隊參謀長としての君の鬼謀神策は遂に日本海大捷となりて此の戰役に止めを刺すに到り而して當代無比の戰術家たる定評は、復た動かすべからずなりぬ、何ぞ其れ偉なるや、日清の役一大尉に過ぎざりし、彼が北清事變の際には常備艦隊參謀長となり日露の役には聯合艦隊參謀長となり、今又艦隊司令長官として同盟國の盛典に參列せんとす、異數と云はゝ異數なり

◉遮莫材器の上より夙に海軍大臣を以て擬せられたる彼が、猶未だ之を贏ち得さる否贏ち得ることのあるべしと信ぜられざるを見れば、海軍は何處迄も薩の海軍なる哉、聞く、薩人より聚らん事を彼に勸むるものあり、彼れ聽かずして鄕里より聚る是れ其の大臣たる能はざる所以なりと、或は然らん、而も是に於てか益す彼の志尙の凡ならざるを見る

◉彼は今や海軍の花なり、花ならば八九分迄開きたる所なり、兼好法師曰く、花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかと、我が島村在り焉

島村菊太郎

◉天理敎々會長島村菊太郎、病を以て大和國丹波市の本山に逝く、享年五十有三、追手筋に屹立せる、天理敎の建物を觀る者は、何人も其の宏壯なるに驚かぬはなかる可し、況や所管の信徒が四國、中國、九州、臺灣、朝鮮乃至、支那に亘りて、幾十万の多きを數ふると云ふに於て、其の驚きは更らに一層を加へざるを得ず、而かも是れ我が島村の辛苦開拓する所に係れる也、彼は香美郡三島村久枝の産、少壯佐川に赴き、酒店に雇はる、主家倒産するに及び、去つて大阪に遊び嗜好する所の淨瑠璃を語つて、流浪する內、病に罹り人の勸めに從ふて天理敎に入りしが、幸にして治癒するを得たり

◉彼が一生を布敎に托せんと決心したるは、此の時に始まる、斯くて、彼は歸縣して一心不亂に、敎旨の宣傳に努め、千艱、万難を排して、奮鬪すること二十年、遂に今日の盛大を見るに至れり、天理敎の獨立を見たる今日、敎祖誕生の地に

於て永眠す、彼に在りては何等の遺憾なかるべし、彼は無學、無教育の平凡なる人物のみ、而かもよく此の如き大事業を爲せる所以は一にインスピレーションの結果たらすんばあらず、芥子種の信も以て山を移す可しと、誠なるかな言や

◉彼に子なし、管長中山信次郎の甥を養ふて嗣となすの約ありと、但し、高知教會長の地位を何人が代り襲ふかは、未だ之を詳にせず（明治四十三年稿）

酒造家中の變り者

◉高知の酒造家中、由來傳ふ可き人物に乏しからず、或は其の家系の純潔なるに於て、或は一代成功の範を垂れたるに於て、其の他造石高の卓絶せるに於て、若くは釀造品の芳醇なるに於て、名聲夙に著聞せる者縷指するの煩に絶にず、就中須賀吉次、谷岡金之助の二人者は、其の同しく斯界の俊材たる以外に、共に政治的操守の他と著しく趣向を異にせるの點に於て婉たる花上、更らに一段の色彩を添ふるの觀なくんばあらず

◉最近縣下の政治地圖が、國民政友の兩派に鮮かに彩らるゝに至つて、我が高知市中の酒造家の多くは、一朝にして脆くも國民黨中の色内に繪き込まれたるに拘らず、谷岡須賀の二人者に限り極て嚴格に舊操を固執し、卓立して大勢の嚮ふ所に背き、今尚依然として渝らざる、川久保福馬の如き特殊の立場に在者は別として、世間窄れに見るの奇觀たらずんばあらず

◉之を須賀に觀る、彼れは下街同業者の分在して、櫻木以下有力なる同業者が、滔々高知新聞の同情者たらんとするの時、彼は獨り殆んど獨り、土佐新聞の熱烈なる味方なりき、而かも彼は一面に於て酒造組合長の地位に在り、若し彼れにして普通同業者と同樣の考へを有せむには、彼は夙に國民黨中の人たらむのみ、何を苦むでか有力なる多數同業者と相桔抗するの苦みを敢てせんや

◉谷岡にしても亦然り、彼れが十余年來の知已たる春田、數十年來の緣者たる伊野部等が、相背いて國民黨に投ずるを冷笑しつゝ、幾多の勸誘、あらゆる誘惑を叱し去り、孤軍を奮戰場裡に進めて飽く迄も快を叫べる所、豈聊か風變りと

せざらんや

◉吾輩、未だ此の二人者が、如何なる政見抱負のあるありて、獨り大勢の歸嚮する所に反し來り、將來尙且つ反し行かんとするかを詳かにする能はざるも、想ふに二人者必ずや其の觀る所を同ふす可く、而してそが、未來の行動に對しては、多少の注目に値す可しとせむ

◉谷岡は年少氣鋭、頭腦あり口辯の才を有す、須賀は半ば老成の境に達して思慮周密、口太甚吶なりと雖も、いふ所よく衆に容用さる、須賀は將來市實業界の重鎭として更らに倍々顯はる可く、谷岡は寧ろ政治家として議政壇上、議論を上下するに適せんか

東元多三郎

◉土佐で洋服と云へば東元を聯想し東元と云へば直ぐ洋服を聯想する洋服屋の主人公としての多三郎君は、慥かに成功者中の一人に數へねばならぬ

◉乃ち、君は一事業の上に於て、既に一城の主となり得たのであるが、其の鬱勃たる雄志は、靜として種崎町の一角に、羅紗を對手に据はつてゐるに忍びず、今や海には帆船を浮べ、陸には諸銀行會社の株を買ひ占め、就中德島水電株の如きは殆むど其全數の三分一以上を一人して持つてゐる、君の德嶋方面に於ける勢力は實に隆々乎として當れないと云ふことだ、君は猫の色事の如く、人の知らぬ間に偉大なる双翼を張つてゐるのである

◉目下の處土佐で東元多三郎と謂つたつて、市會議員の撰擧にも落選する程のものだが、今後の君は想ふに必ずや、土佐の福澤桃介として、四國の實業社會に横行濶歩することであらう、其の温順なる性格と、動もすれば山的に飛び放れた思ひ切りをする所などは、所詮政治家の柄ではないが實業家としての大成功は疑ふ迄もないことだらうと一般に認められてゐる

◉時代の變遷は恐ろしきものだ、新舊の交代は已むを得ぬ勢だ、多年川崎幾三郎君や、宇田友四郎君などを以て代表せられてゐた土佐の實業界は、今後幾何もな

念を禁じ能はざる者、豈啻に國民黨の諸公のみならむや

◉然れ共、之を率直にいへば、彼や到底政治家の器に非ず、妙籌奇略、政府及び各派の間に應酬縱横、尚且つ、口を開けば經國の策案、滔々舌を轉じて出づるの才技は、彼に向つて遂に望む可からずして、のの本領なるも彼は斷乎別に存ずるを知らざる可からず

◉即ち、山岳を崩して、瀘車を走らせ、電氣を起して、自然力を應用し國家民衆を利するの一面、又た自已の懷中を裕かならしむ、是れ彼の本領也、彼ば工學博士の工業家也、實業家といはゞ云ひ得べし、而かも其の長所は技術的方面の聊か大なる所に於て發揮さる、即ち彼は主として物を相手とするの技術者、人を相手とするの政治家に非ざる也

◉此の故に、彼が這般の落撰は、彼の爲に圖るに、必ずして敢て深く悲むを須ひず、啻に悲むを須ひざる而已ならず、彼の本領より打算せば今日の落撰後日反つて、當撰に優るの結果を見るやも知る可からず、紛々たる政界の覇絆を脱して、

くして、東元多三郎君を以て代表せらるゝに極まつてゐる、君の今後の發展振りは、餘程土佐人の注目に値するものがあらうとは、必ずしも記者一個の想像でない、君を知れる人、君を解せるの人々の異口同音に驚異の色を帶びた聲で絶叫する所である

◉全身福々しく肥滿せるところ、耳朶を悪比壽樣然として、優に五六粒の米粒を掬ひ得る點などば、敢て石龍子を俟つ迄もなく、何人にも金に緣ある人として判斷される、勢に乘じて山師の煽動に引つかゝらず、徐々に進むだならやがて大空に翺翔するの凰たらむことを期して待つ可きであらう

仙石貢

◉第十二回總撰擧に於て、必勝を豫期されし名士の、以外なる敗北を招ける者尠なからずと雖、我が仙石貢博士の如きは、蓋し、意外中の意外なる者ならずんばあらず、あゝ敗軍の將、再び、兵を語るの資格を失ひたる、觀來れば一片、哀愁の

驀然、其の長所に加鞭す、仙石の大、夫れ斯の如くにして益々大なるを致さんか

◉但だ、身既に一政黨の領袖たる地位に在り、重ねて、多量抜群の兵を小敵の前に進めて捷たず、敗衂の飛電、遠く海を越ねて到りたるの時彼が波濤万里の夢、克く穏かなる可き乎

須藤傳次郎

◉甚しい哉、近時の所謂敎育なるもの活氣なきことや、學校は學問の切賣場にして、員敎は敎科書の蓄音機に過ぎざる世の中に、獨り第一高等學校が、獨特剛健の校風を持して燦然學界の明星たるは、洵に以て慶するに足る、我須藤理學士は一校の敎授として、而かも聲望隆々たる良敎授なり

◉一高腕白者等は、有らゆる敎授に對して、有らゆるアダ名を付す、須藤のアダ名は傳チャンなり、傳チャン々々々、何ぞ其の稱呼の可愛らしくして、親愛の意の藹然たるや、傳チャンは實に、一高健兒の崇拜の中心なり、怒は洒々落々にして、人に接する毫も城府を設けず、よく勤め、よく遊び、街はず、誇らず、一見倘書生の如し、彼は人に好かるべき美質を有す、殊に學生に好かるべき性質を有す、彼れは當初法學を修めんとせしも、感ずる所あり、理學を修め、遂に敎育家たるに至れり、英才を育成するの樂、天下何物か之れに加へん彼れよく、其の處する所を撰びたりと謂ふべし

◉彼の夫人や、賢にして内助の功あり、其の未だ嫁せざる、同時婚を求むるもの曰く幸德、曰く須藤、皆傳次郎を以て名とす、時に秋水の文名高く世に聞へて、須藤は未だ窮措大なるを免れず、而かも夫人見る所あり、彼に往かずして此に嫁す、幸德死刑の今日、知らず夫人の感果して如何　（明治四十三年稿）

270
377

大正三年四月三十日印刷
大正三年五月七日發行

高知縣土佐郡小高坂村四十九番地
編著者　片岡良主

高知縣高知市本町七十九番地
發行所　土陽週報社

高知市本町百卅三番地
印刷人　中島專吉

高知市本町百卅三番地
印刷所　本町活版所
電話四〇〇番

終